

三軒屋

物見台遺跡

発掘調査報告書(1)

1986

東北電力株式会社山形支店
山形県教育委員会

三軒屋

物見台遺跡

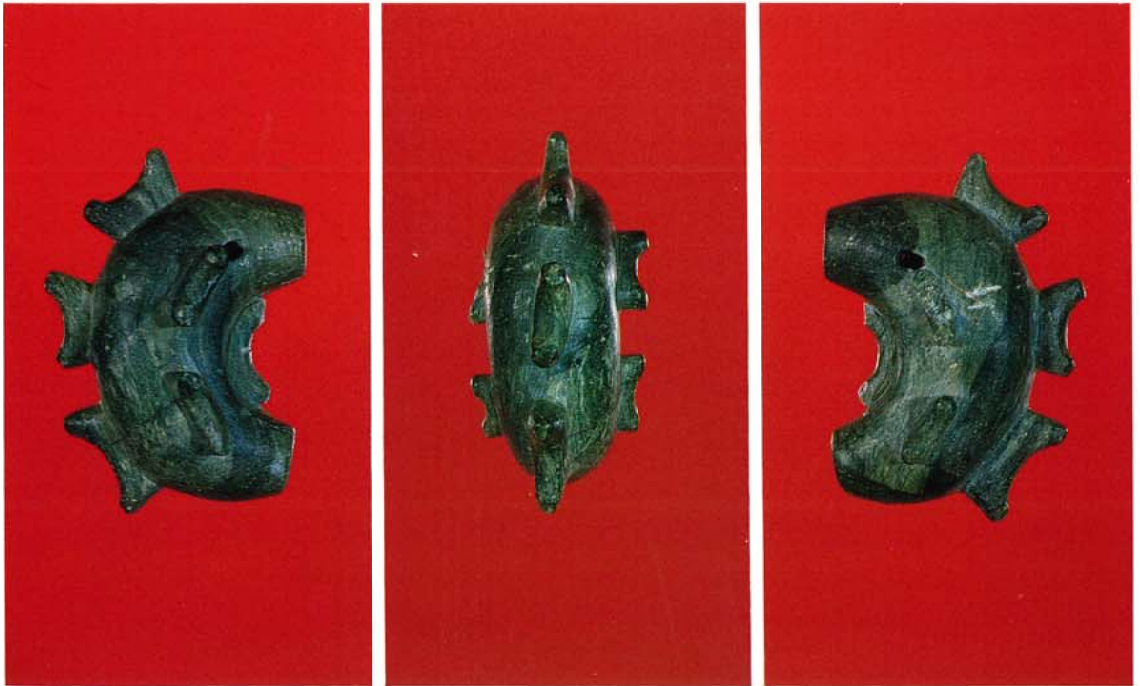
発掘調査報告書(1)

昭和61年3月

東北電力株式会社山形支店
山形県教育委員会



1・2号住居跡全景



RQ1子持勾玉



序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和59年度に実施した東北電力送電線鉄塔（長神線）移設工事に伴う三軒屋物見台遺跡の発掘調査の記録をまとめたものであります。

調査では、限られた小範囲の中から古墳時代後期の竪穴住居跡2棟を検出し、同時に住居に伴った多数の完形土器他一括資料とできる遺物群がまとまって出土するなど貴重な成果を得ることができました。

これらの遺構と遺物は、当地域においてこれまでの発見例が乏しかった事もあり、古墳時代後期の解明にとって重要な手がかりを与えてくれるものと考えます。

近年、県内各地で開発事業が増加するに伴い、埋蔵文化財とのかかわりも増加の傾向にあります。両者の間には困難な問題も山積の状況ではありますが、住民福祉・生活文化の向上とする同一の立場から調整を行ない、今後とも埋蔵文化財保護のために努力を続けてまいる所存であります。

最後になりましたが、調査にあたって多大な御協力をいただきました地元三軒屋地区の方々をはじめ中山町教育委員会、東北電力株式会社山形支店の関係各位に対し心から感謝申し上げますとともに本書が埋蔵文化財の理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

昭和61年3月

山形県教育委員会

教育長 高 橋 和 雄

例 言

- 1 本書は、山形県教育委員会が東北電力株式会社の委託を受け、昭和59年度に実施した送電線（長神線）鉄塔移設工事に伴う三軒屋物見台遺跡（山形県遺跡地図 No, 397）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和59年11月13日から同年11月22日までの延8日間行なった。
- 3 遺跡の所在地は、山形県東村山郡中山町長崎字三軒屋地区であり、地区の人々によって通称「物見台」と呼ばれている。
- 4 発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査）

同 上 佐藤 庄一（同 埋蔵文化財係長）

現場主任 阿部 明彦（同 技 師）

調査員 里見 等順（同 嘱 託）

事務局 事務局長 小関 陽三（同 課 長）

事務局長補佐 後藤 文夫（同 課 長 補 佐）

事務局員 斎藤世都子・中嶌 寛・氏家修一（同 主 事）

- 5 発掘調査にあたっては、中山町教育委員会、同町立歴史民俗資料館、中山町三軒屋地区他関係機関より多くの御協力を得た。ここに記し心から感謝申し上げる。
- 6 本書の作成は、阿部明彦が担当した。遺物の整理復元と実測、遺構トレースは佐藤達弥、荘司宏子、三沢友子、辻 広美、山口美和子がこれを補助した。編集は、阿部明彦、長橋 至が担当し、全体について佐々木洋治が総括した。
- 7 本書の作成にあたって下記の機関、個人より御指導と助言を賜った末尾ながら、列記して感謝の意を表したい。

明治大学考古学博物館 熊野正也氏、市立市川考古学博物館 堀越正行氏、福島県文化センター 目黒吉明氏、同大越道正氏、仙台市教育委員会 早坂春一氏、同工藤哲司氏、宮城県教育委員会 藤沼邦彦氏、東北歴史資料館 小井川和夫氏、多賀城跡調査研究所 丹羽 茂氏、柏倉亮吉氏、加藤 稔氏、川崎利夫氏、志間泰治氏、阿子島 功氏（順不同）

目 次

I 調査の経緯	1 ST1 竪穴住居跡…………… 6
1 調査に至るまでの経過…………… 1	2 ST2 竪穴住居跡…………… 14
2 調査の方法と経過…………… 1	3 SP3 柱穴様遺構…………… 17
II 遺跡の立地と環境	4 SP4 柱穴様遺構…………… 17
1 遺跡の立地…………… 2	5 SX5 性格不明遺構…………… 18
2 歴史的環境…………… 2	6 遺構外出土遺物…………… 18
III 遺跡の概要	V 考 察
1 遺跡の層序…………… 4	1 遺構について…………… 19
2 遺構と遺物の分布…………… 4	2 遺物について…………… 20
IV 遺構と遺物	VI まとめと課題 …………… 30

挿 図 目 次

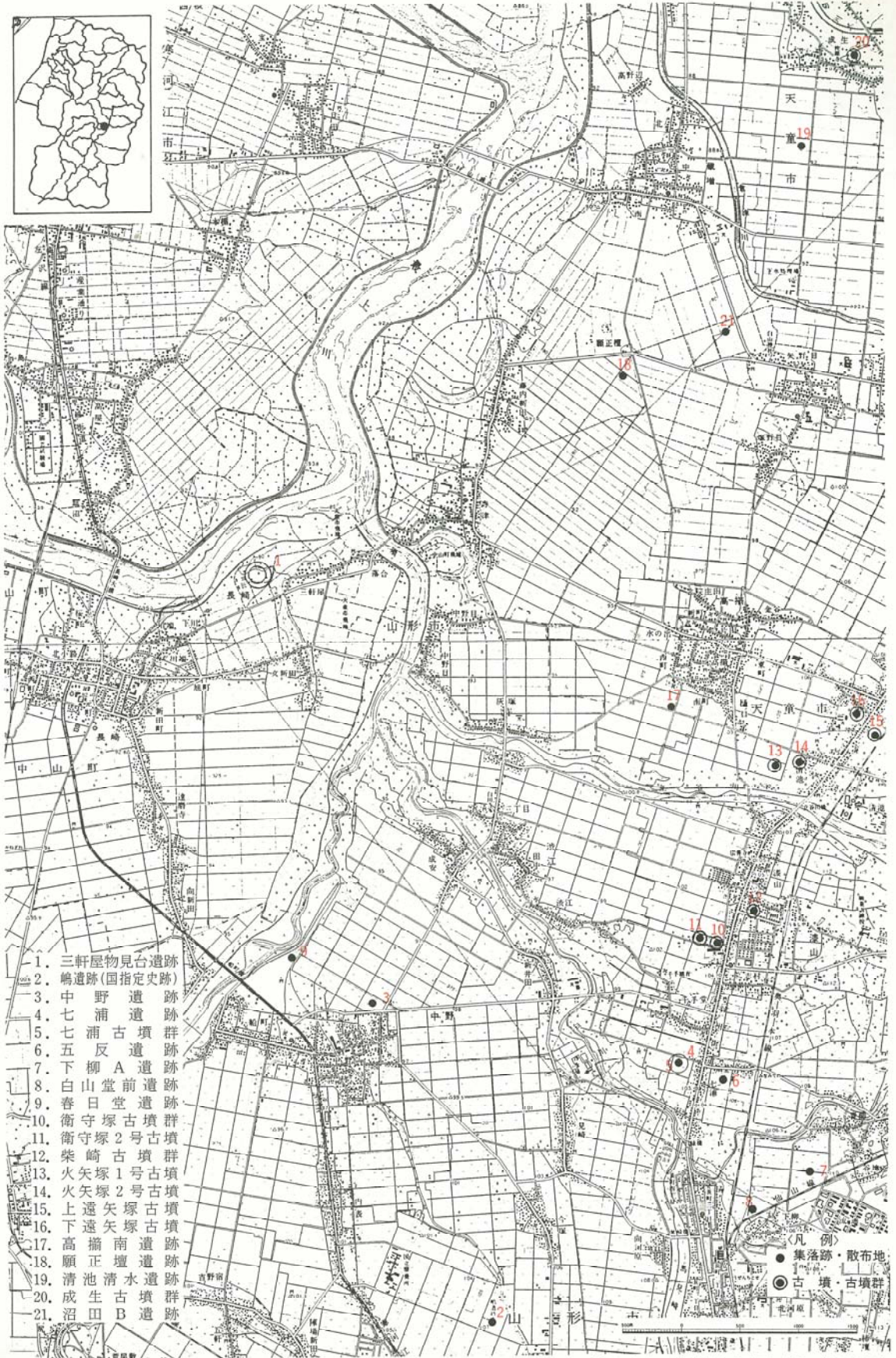
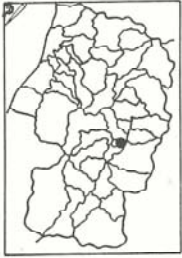
第1図 遺跡位置図 (1/50000)
第2図 遺跡概要図
第3図 試掘調査概要図
第4図 遺構遺物配置図
第5図 ST1・2住居跡 (S=1/60)
第6図 ST1・2カマド, 柱穴他部分図 (S=1/40)
第7図 土師器実測図 (1)
第8図 土師器実測図 (2)
第9図 土師器実測図 (3)
第10図 土師器, 小玉実測図 (4)
第11図 土師器実測図 (5)
第12図 須恵器実測図
第13図 子持勾玉実測図
第14図 高坏脚部断面図
第15図 遺物集成図
第16図 坏・高坏口縁部断面図
第17図 お花山古墳群出土の土師器

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景 (東から) 遺跡近景 (西から)
図版2 発掘風景 (東から) ST1・2全景 (南から)
図版3 ST2東西土層断面 (南から) 他
図版4 ST1床面上での遺物出土状況他
図版5 ST1北西コーナーでの出土状況他
図版6 ST1RP17・18出土状況他
図版7 STIRP13・20出土状況他
図版8 土師器高坏
図版9 土師器 坏
図版10 土師器 鉢
図版11 土師器 甕
図版12 土師器甕・甌
図版13 ST1出土土師器坏・鉢
図版14 土師器高坏・甕 (ST2)
図版15 子持勾玉・須恵器・丸平玉
図版16 土師器器面調整

付 表

表-1 遺物集計表	表-3 遺物観察表 (1)	表-5 遺物観察表 (3)
表-2 登録遺物一覧	表-4 遺物観察表 (2)	表-6 遺物観察表 (4)



- 1. 三軒屋物見台遺跡
- 2. 遺跡(國指定史跡)
- 3. 中野遺跡
- 4. 七浦遺跡
- 5. 五浦古墳群
- 6. 下柳反古墳群
- 7. 白山堂前遺跡
- 8. 春日守塚古墳群
- 9. 衛守塚古墳群
- 10. 柴崎塚古墳群
- 11. 火矢塚1号古墳群
- 12. 火矢塚2号古墳群
- 13. 上下遠矢塚古墳群
- 14. 遠矢塚古墳群
- 15. 高願正池遺跡
- 16. 願正池清古墳群
- 17. 清池清古墳群
- 18. 清池清古墳群
- 19. 清池清古墳群
- 20. 沼田遺跡
- 21. 沼田遺跡

凡例
 ● 集落跡・散布地
 ○ 古墳 古墳群

第1図 遺跡位置図 (1/50000)

I 調査の経緯

1 調査に至るまでの経過

本遺跡は、昭和36年山形大学教授柏倉亮吉氏により発掘調査され、出土土師器の様相から東北南部における土師器第IV型式（住社式）^{注1}に併行する県内の標準遺跡（三軒屋式）として位置づけられた。翌昭和37年～昭和39年にかけては、山形市嶋遺跡の調査が行なわれ、本県における古墳時代の集落や土師器研究にとって一つの画期をもたらすこととなる。本遺跡の調査は、出土遺物に対する評価も含めて、これら一連の調査・研究の嚆矢としてその学史的意義は高い。しかし、正式な報告は無く、具体的記述は嶋遺跡報文^{注2}に委ねられる形となった。

昭和48年に入り、「東北横断自動車道仙台―酒田線」の一部として山形―寒河江間の整備計画が決定され、遺跡中央部に計画路線に係る事になる。分布調査、事前協議を重ねた結果、用地買収後緊急調査を行なう事とし、昭和58・59年の二ケ年にわたって発掘調査を実施している。また用地内に立つ送電線鉄塔の移設が必要となり、東北電力株式会社の要請を受けた県教育委員会は、昭和59年11月に、高速道路用地の東約30mの地点、鉄塔建設用地約70㎡について発掘調査を行なう運びとなったものである。

2 調査の経過と方法

発掘調査は昭和59年11月13日～11月23日まで延8日間実施した。また、調査に先立つ昭和59年10月22日に試掘を伴う分布調査を行ない一部プラン等から竪穴住居跡の存在が確認された(第3図)。調査対象となる鉄塔移設用地は、遺跡の東南部にあたる果樹畑地内にあり、施工面積は8.7m四方約75㎡である。

調査は、限られた小範囲の面積と言う制約から、鉄塔用地8.7m四方の内、用地境界等を勘案して8.3×8.3mの調査区を設定する事から始め、表土から順次掘り下げを行なった。後に遺構プランとの係わりから調査区北西部を1×4m拡張し、最終的な精査・記録面積は72.89㎡となっている。表土(I)、黒色シルト(II)を順に剥ぐと、黄褐色砂質シルト層の地山に達し、住居跡のプランが検出される。当初住居跡は一棟かと考えられたが、ST1の東側プランが不整になる事、ST2のプラン内覆土が全体に黒ずんでいる事等から、ST1を切るST2の存在が確認された。また、ST2の南辺に重複するSX4があり、これら遺構の覆土・プラン等の状況から、ST1→ST2→SX5の変遷を捉えた。次に土層観察用のアゼを十字に残して覆土の除去を行なった所、ST1のカマド、柱穴、土壇、西辺にまとまる床面上の遺物群他を検出し、写真撮影、平面図作成等の記録を行なって調査を終えた。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

本遺跡は、山形県東村山郡中山町長崎字三軒屋に所在する。中山町は山形市の西北方約10kmに位置し、西に出羽丘陵、北に最上川、東を須川によって各々限られる水田地帯である。遺跡の立地する一帯は、最上川によって形成された自然堤防で周囲の水田や畑地に比べ2～3mの高まりを見せる。最上川、および北流して最上川へ注ぐ小河川は、遺跡域の四至を開析し、あたかも浮島状とでも呼ぶべき小台地を形成している。現最上川河床との比高8m、台地上の標高91～92.7mを計る。遺跡の範囲は、遺物の散布範囲等から見て、小台地上一帯と考えられ、その規模は東西約200m、南北約100mを計る。遺跡の乗る台地上は高燥であり、砂や砂礫等を基盤とする所から排水がきわめて良い。現況は果樹等畑他となる。一方遺跡南側前面には、旧河道と見られる低湿地が明瞭に残っており、幅約100mの規模で東西に連なっている。現況は、一部を除いて水田となる。一方、北側は、遺跡直下にまで現最上川の氾濫原が広がっており、堤防築造以前の眺望は比類ないものであった事が推測される。まさに「物見台」と言う地名の所以であろう。

2 歴史的環境

山形盆地で確認される古墳および古墳時代集落跡の分布は、地形や水系等との係わりから(1)盆地西縁の丘陵および傾斜変換線付近、(2)盆地中央平地域、(3)盆地東縁の丘陵および傾斜変換線付近、(4)盆地北縁部付近の丘陵および平地域、以上の四地域に大別できる。これらは、古墳群としてのまとまりが主墳を中心とする群集墳といった構成上の在り方等からさらに幾つかに細分される可能性があり、古墳時代の地域や社会組織を強く反映したものとして認識される。現在まで確認できた古墳群は、山形古墳群、楯山・高原古墳群、山辺古墳群、村木沢・金井古墳群、漆山古墳群、高揃古墳群、高瀬山古墳群、河島山・大塚・後原古墳群の計8群、約180基程である。また、これら古墳群との有機的関連を持つと考えられる古墳時代の集落もその周辺に多い事実があり、従来の調査では、菅沢二号墳^{注4}や大之越古墳^{注5}等を主墳とする村木沢・金井古墳群の周辺部等で顕著である。お花山古墳群^{注6}と鷲ノ森遺跡^{注7}等でもそうした捉え方が可能であろう。一方、本遺跡の場合では、盆地の低位平野部であり、直接的に関連すると考えられる古墳の発見はない。但し、現地調査段階では、未確認ながら、遺跡西方近郊の畑地内に幾つかの塚が存在したとの情報もあった。最上川右岸、須川左岸といった地域区分から見れば、坊主窪古墳群等の山辺古墳群等との関連も考えられよう。



〈凡例〉

 遺跡範囲

 調査区・調査トレンチ

第2図 遺跡概要図

III 遺跡の概要

1 遺跡の層位

調査区の層序は、層厚15~20cmの暗褐色シルト層（耕作土）、15~20cmの黒褐色シルト質粘土（II層）以下黄褐色砂質シルト（地山）となり、II層およびIII層の一部に耕作他による攪乱が入る。右第3図は、試掘調査(担当渋谷孝雄)時におけるa-a', b-b'地点の模式的土層図である。これら基本的な層序は、高速道路用地部分の調査においても認められたもので、地点的な差異はほとんどないと言える。

遺構プランの検出は、III層直上~III層上面にかけてであり、II層はST1を切るST2の最終の覆土と同一であった。すなわち、II層を覆土の最上部にのせるものとそうでないもの間には、時間的隔差が大きいと考えられる。

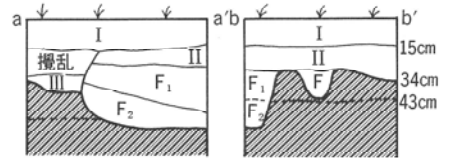
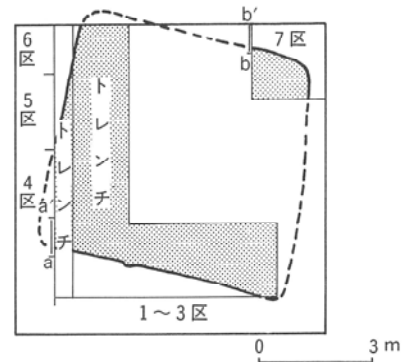
2 遺構と遺物の分布 (第4図)

検出された遺構はST1, ST2の竪穴住居跡2棟、柱穴SP3・4、性格不明の土壇(幾分か古い時期の攪乱?) SX5が主要なものである。各遺構における出土遺物点数は、右表に掲げたが、ST2のプランがST1内の住居プラン内にほとんど含まれてしまうため、ST2覆土上半の遺物はST1の覆土内出土遺物として取り上げた可能性がある。

ST1では、カマド西側部分、および西壁沿いに、床面上に廃棄されたと考

えられる一連のRP登録遺物があり、高坏、坏、鉢、甕、甔等の器種構成が知られた。

ST2の床面直上では、RP3・4等の土師器、SP3では須恵器蓋破片が出土している。



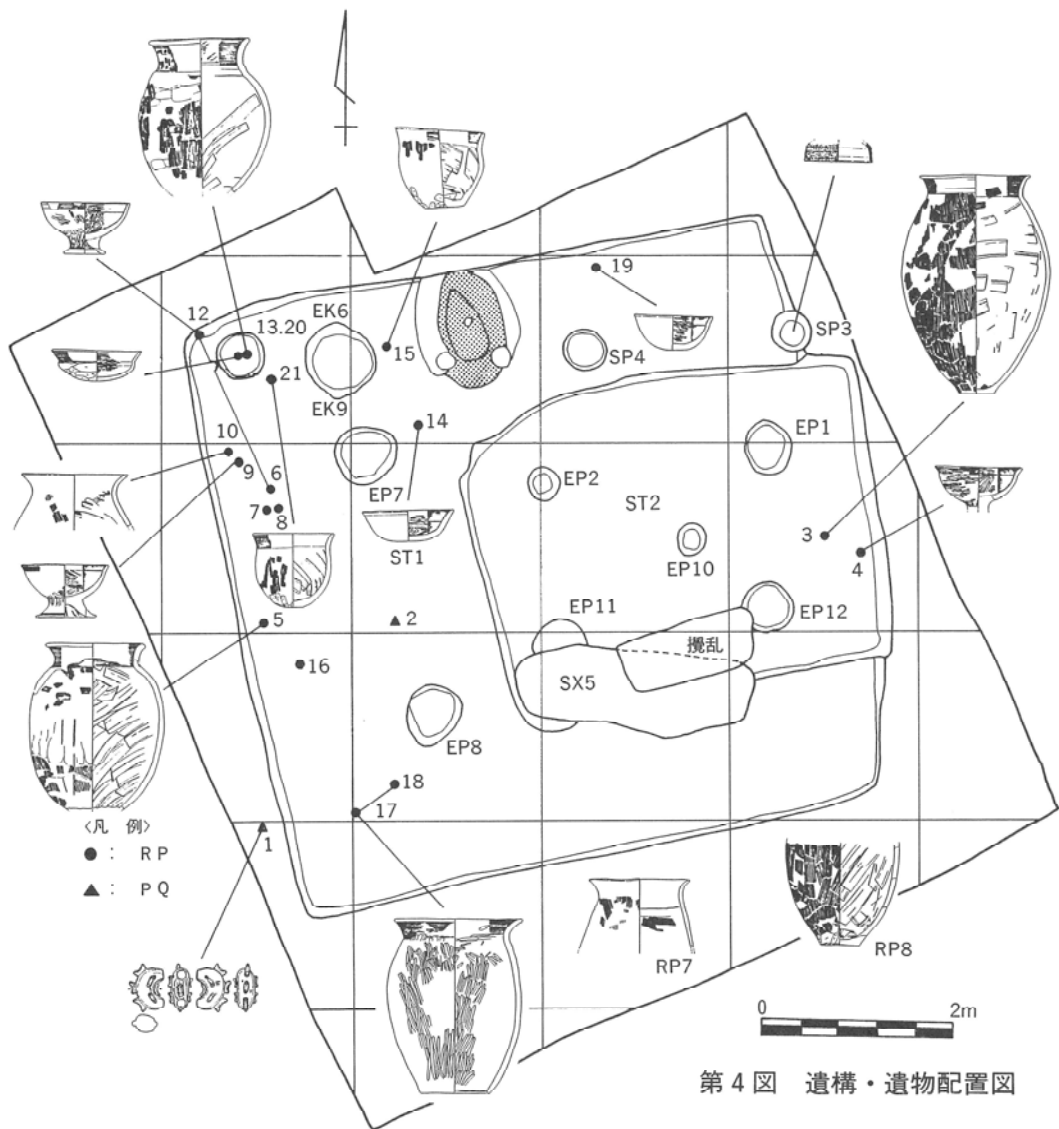
〈土層記号〉
 I 暗褐色粘土質シルト F₁ 暗黄褐色シルト
 II 黒褐色シルト質粘土 F₂ 黄褐色シルト
 III 黄褐色砂質シルト

第3図 試掘調査概要図

表-1 遺物集計表

遺物	土	師 器				須 恵 器 石 製 品		計
		甕他体部	甕他口縁	甕他底部	坏・底部	蓋	玉・勾玉	
S	F	138	15	7	11	-	-	171
	Y	177	9	3	24	-	1(丸玉)	214
	EL	27	2	2	-	-	-	31
1	RP	甕 (7) 鉢 (2) 甔 (1) 高坏 (2) 坏 (5) その他 (149)						(149)
	RQ	丸玉 (RQ2)						
S	F	37	3	-	4(非内黒) 4(内 黒)	-	-	48
	Y	47	-	2	2(内 黒)	-	-	51
2	RP	甕 (1) 高坏 (1) その他 (233)						(233)
SP	F	-	-	-	-	1	-	1
遺構外	II	-	-	-	-	-	1(子持勾玉)	1
1~3区		60	10	2	3(内 黒) 1(非内黒)	-	-	76
4~6区		20	-	1	-	-	-	21
7区		2	-	-	-	-	-	2
計		508	39	17	49	1	2	616 (998)

※ RP・RQ () 内数字は個体数、その他は破片数RPでのその他 () は復元に至らなかった別個体小破片数



第4図 遺構・遺物配置図

表一 登録遺物一覧

種別	No.	遺物	出土地点	備考	種別	No.	遺物	出土地点	備考
RQ	1	子持勾玉	住居外II層下部	完形	RP	12	高坏	ST1(Y)	破片
RQ	2	丸平玉	ST1(Y)	完形	RP	13	甕	ST1(Y)	完形
RP	3	甕	ST2(Y)	完形	RP	14	坏	ST1(Y)	内黒・完形
RP	4	高坏	ST2(Y)	内黒	RP	15	鉢	ST1(Y)	坏破片も含む
RP	5	甕	ST1(Y)	横位	RP	16	甕(壺?)	ST1(Y)	底部破片
RP	6	高坏	ST1(Y)	近接 底部破片	RP	17	甕	ST1(Y)	同一個体
RP	7	甕	ST1(Y)		RP	18	甕	ST1(Y)	
RP	8	甕	ST1(Y)		RP	19	坏	ST1(Y)	内黒
RP	9	高坏	ST1(Y)	逆位・完形	RP	20	坏	ST1(Y)	非内黒
RP	10	甕	ST1(Y)	口縁部破片	RP	21	鉢	ST1(Y)	完形
RP	11	甕	ST1(Y)	口縁部破片					

IV 遺構と遺物

1 ST1 竪穴住居跡

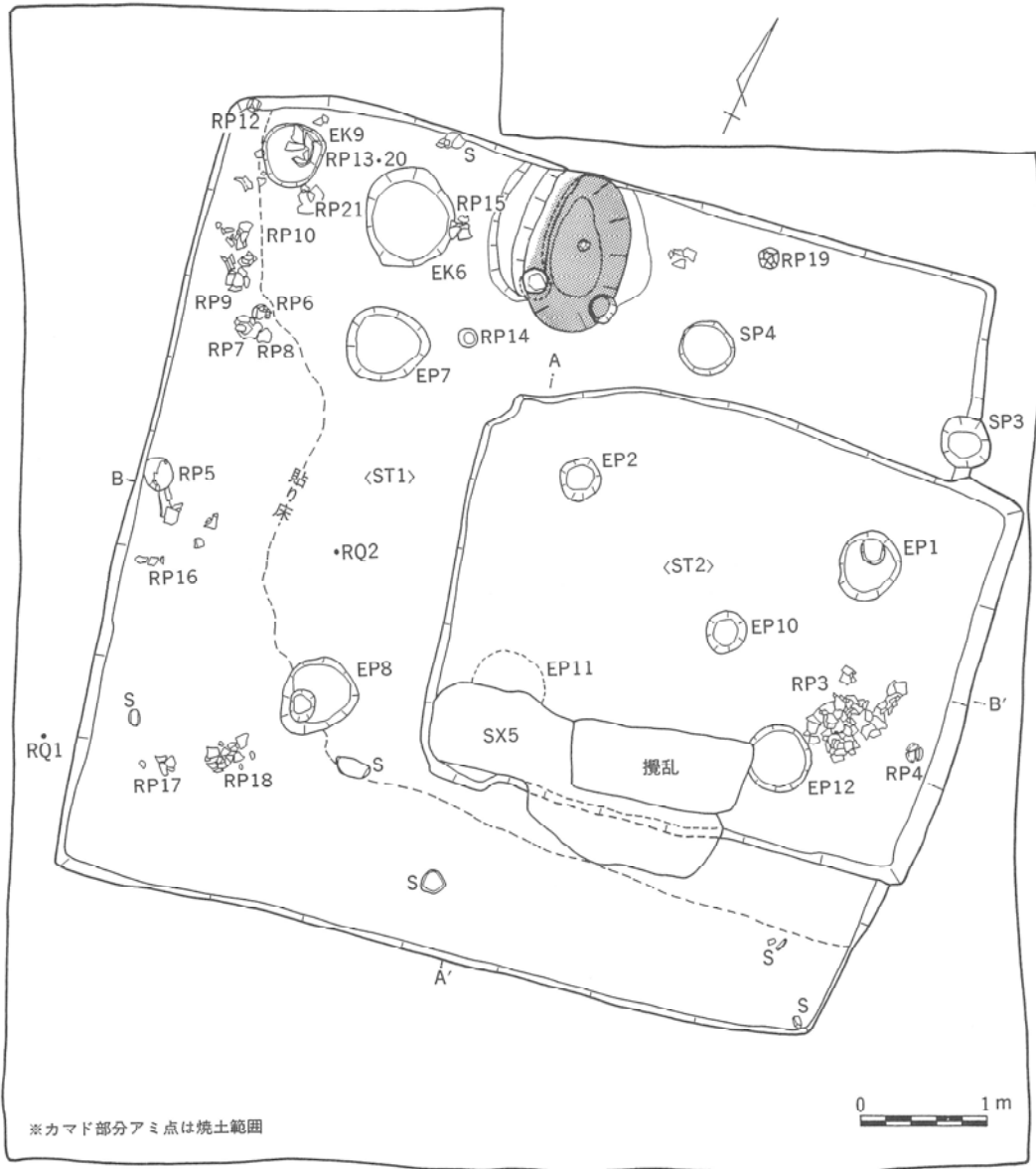
〔平面形・重複〕 調査区内にその全域が入る大型の住居跡で、東西軸6.44m、南北軸6.32mを計る略方形プランを呈す。住居跡中央から東壁にかけては、主軸方向をほぼ同一とするST2に切られ、さらに東壁北側の一部をSP3、カマド東脇をSP4が切る。カマドの位置から、その主軸を南北方向とする事がわかるが、軸長では東西が幾分か長い。主軸方位は、N-10°-Wである。

〔壁〕 検出された壁は地山としたIII層で、床面からほぼ垂直に立ち上がる。北壁部分での状態が良く、東西壁の南半、および南壁は、地形が全体に南下り勾配を示す事などから遺存が悪い。北壁での検出壁高は22cm、南壁で5～7cmを計る。

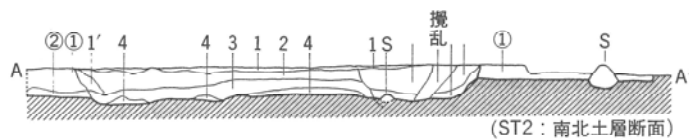
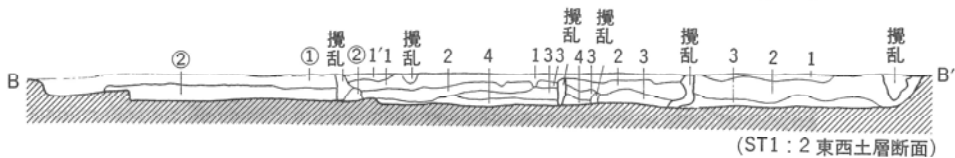
〔床面〕 床面は、住居掘り方の底面に2～3cmの厚さで灰白色粘土を貼り、堅く打ち固める貼り床の形式をとるが、西壁～南壁沿いでは認めなかった。土師器甕RP17・18の出土状況や床面上に据えられたと考えられる円礫等の状態からは当初から貼られなかったと考えられる。そこでは住居掘り方面(地山=III層)と床面が同一となり、幾分軟弱である。床面の高低は、住居中央が幾分低く、壁沿いでやや高いが、極端な差は認めない。

〔柱穴〕 ST1に係わる柱穴はEP7・8の2個である。柱間から見て4本柱と考えられる。他の2個については、ST2がST1の住居床面下まで掘り込んでいるため不明である。EP7・8ともに略円形で、径60～70cm、深さ20～30cmを計る掘り方を持つ。EP8では、柱痕を示すと考えられる径26cmの落ち込みを認めた。EP7・8の柱間は3mで、住居の南北軸に平行している。

〔カマド〕 住居北壁の中央よりやや西側に構築され、全長1.25m、幅1.3mを計る。煙道は認められず、両袖、焚口、支脚等からなる燃焼部だけであった。燃焼部は、側壁に粘土を積み上げて構築するもので、焚口に当たる側壁両端に灰白色で軟質の泥岩を2個内傾気味に据えるが、東側1個は同側壁と共に攪乱を受け欠失している。わずかに袖石を据える為に穿たれた据え方を認めるに止まる。据え方径22cm、深さ5cmを計る。カマド内部の底面中央には、花崗岩をほぼ垂直に立てた支脚があり、埋設部から上部13cmに加熱による赤変を認める。支脚全長18.5cm、幅5.5～7cmを計る。焚口からカマド内底面と西側壁も加熱により赤変し、特に西側壁と奥壁で著しかった。カマド内部の堆積状況は、第6図下段に示したが、焼土と黒灰層が互層を成し、カマド上部が側壁中程の位置から落下した様子が看取される。カマド内からは二次焼成を受けた若干の土師器鉢、甕類の破片が出土した



※カマド部分アミ点は焼土範囲



ST1・2 東西土層断面・ST2 南北土層断面土層注記

- ① 暗褐色細砂質土 (炭化粒子、黄色粘土粒子をまばらに含む ST1 の覆土上層。)
- ② 暗褐色細砂質土 (炭化粒子、遺物破片をまばらに含む ST1 の覆土下層。)
- 1 黒色粘質微砂土 (黒色味が強く、バサつく。)
- 2 暗褐色粘質微砂土 (遺物を含み、しまりある均質層。)
- 3 // // (しまりある均質層。)
- 4 灰黄色粘質土 (貼り床の素材となった粘土そのものか。堅くしまる。)

に留まり、一次的な使用状況を示す遺物の検出はない。

〔土壌〕 カマド西～住居北西コーナーにかけて2基の土壌、EK6・9がある。EK9は、RP13・20を内包するもので、掘り込みの浅いゆるい小窪地状のものであった。EK6は、カマド西隣りにあり、径70～80cm、深さ50cmを各計る略円形を呈し、壁の立ち上がりは急傾である。覆土上部とその周辺には、貼り床に用いられたと同様の粘土層がやや厚く堆積し、そのプラン検出は困難であった。覆土の中位から下位にかけては、焼土や黒色の灰層等を含む事から、カマドとの共時性、機能的関連が推測される。

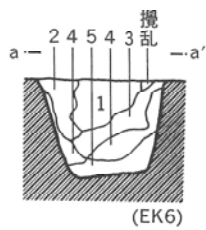
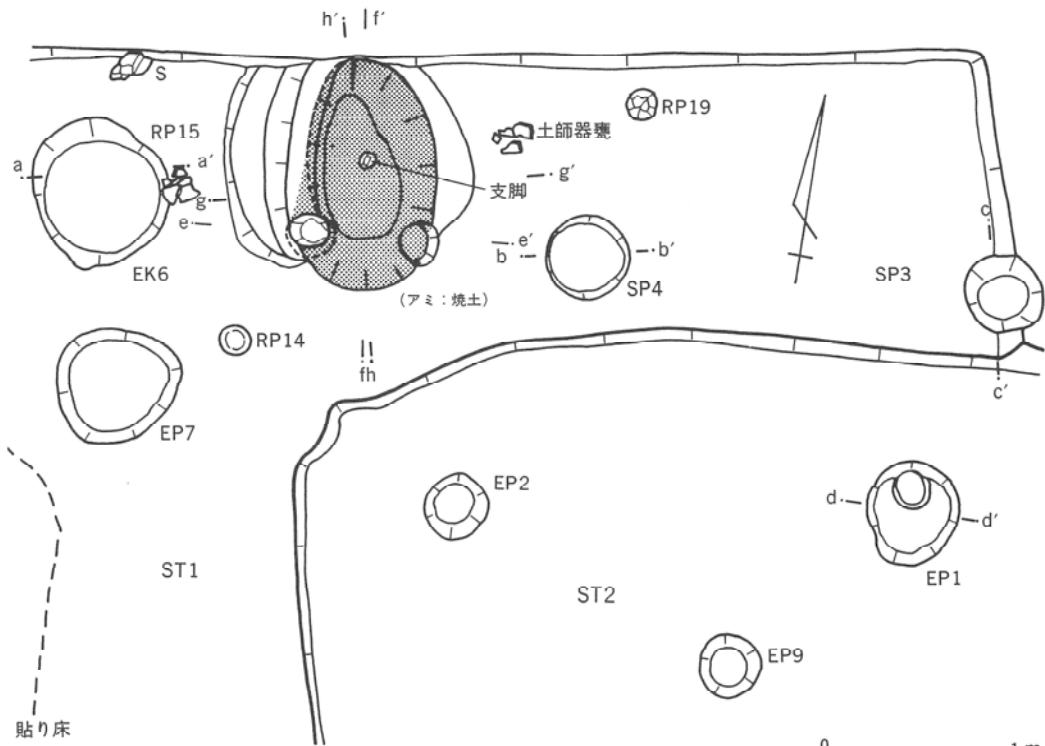
〔堆積土〕 覆土は、大別2層であり、いずれもにぶい黄橙色系(10YR7/3)を示すシルト質土である。カマド周辺を除いては、ほぼ水平堆積を示し、1・2層とも炭化粒子、遺物小片等を含むが、2層～床面にかけて多く認められた。

〔遺物出土状況〕 遺物は、住居の覆土、および床面から出土した。特にカマドの西側、北西コーナー付近、西壁に沿う西辺域に集中的に見られ、RP12・13・20、RP9・10、RP6・7・8、RP5・16、RP17・18(同一個体)等の幾つかの小さなまとまりを持つ。これらは、住居床面における一括遺物として把握できるもので、甕7個体、鉢2個体、甗1個体、高坏2個体、坏5個体等を主要なものとし、器種組成の大方が捉えられる。なお、RQ2は、硬玉質の丸平玉である。

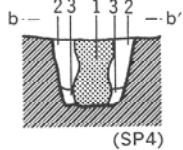
〔出土遺物〕 遺物の概況については先にも述べた。以下では、ほぼ原形に復元し得たもの、および大形破片から復元実測を行なったもの19点(第7～10図)についてその概略を記す。また、坏・高坏の一部破片については、その断面実測を行なったものがあり、第14・16図に掲げた。

覆土内として取り上げた遺物では、破片の接合から坏(17)1点が実測できたにすぎない。一方、覆土内出土として取り上げた遺物の中には、RPN_αで登録し、一括として取り上げた遺物中の別個体小片や、床面出土として取り上げたものと接合したものがある。調査時の不手際を否めないが、覆土の下層部分に遺物の集中が見られた事等に起因すると考えられる。該当例は坏(4)、甕(12・18)の3点であり、遺存率1/2以下と低い。しかし、これらの土器は、他の完形土器と較べて、その胎土、焼成、色調、製作手法等の諸点で様相を大きく異にすると指摘できるものではなく、組成の一端に加えても支障はないと判断される。床面上出土遺物(大形破片類)および完形ないし完形に近い登録遺物では、高坏(1・2)、坏(3・5・6)、鉢(7～9)、甕(10・11・13～15)、甗(16)の計14個体がある。調整技法等個々の細部については表-3の遺物観察表中に記した。

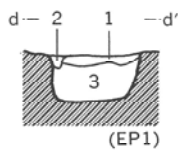
高坏では、脚部形態をやや異にするRP9・12があり、両者ともに内黒である。RP9の脚はやや大きく広がり、RP12では小ぶりで広がりも小さい。坏は、覆土中出土の(17)



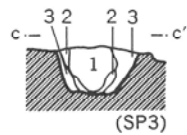
- 1 暗黄灰色シルト
- 2 明灰黄色シルト
- 3 暗褐色シルト
- 4 暗褐色微砂質土
- 5 黒灰色シルト



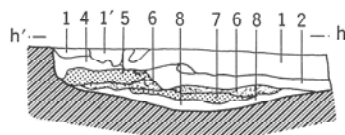
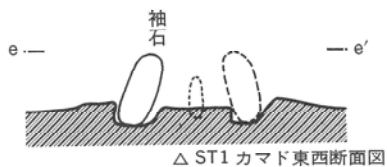
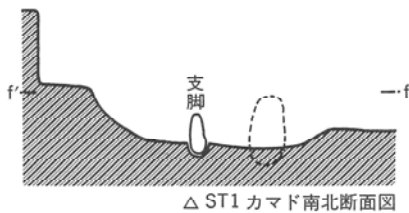
- 1 黒色シルト (柱痕)
- 2 暗黄灰色シルト
- 3 暗黄褐色シルト



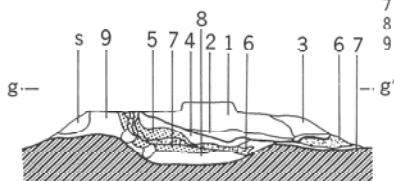
- 1 暗褐色シルト
- 2 黒色シルト
- 3 暗黄褐色シルト



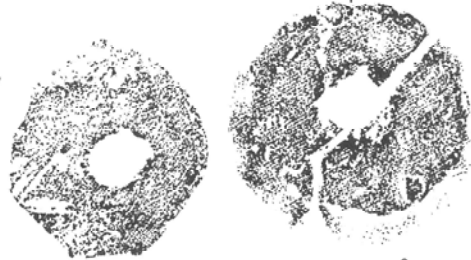
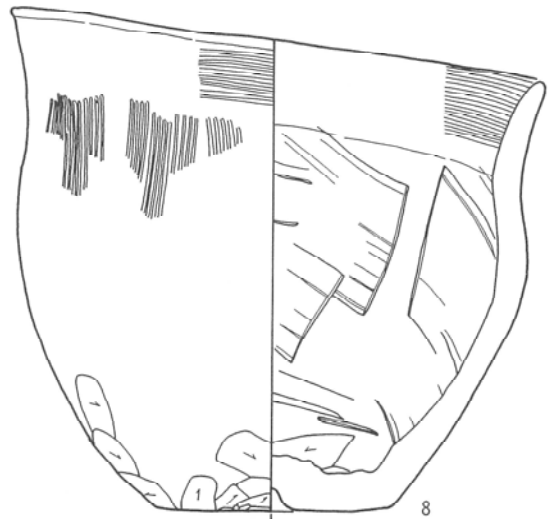
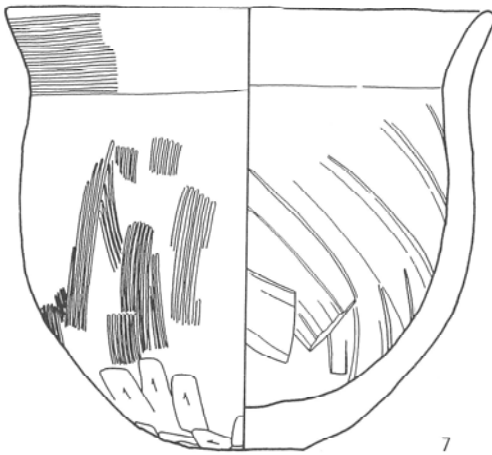
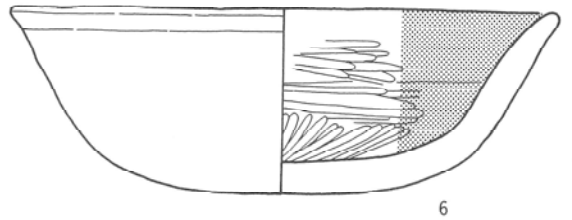
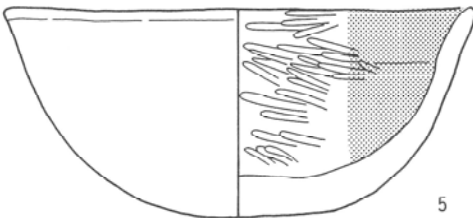
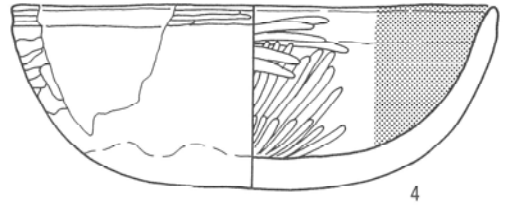
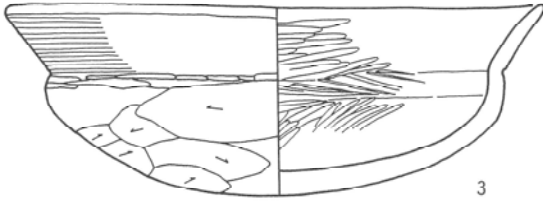
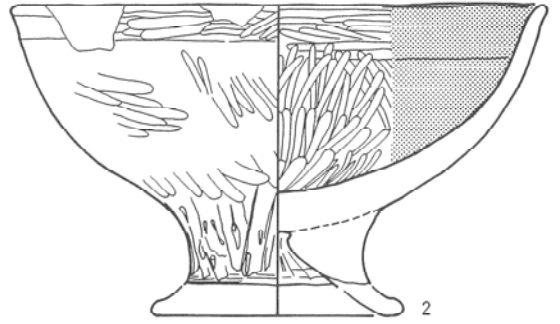
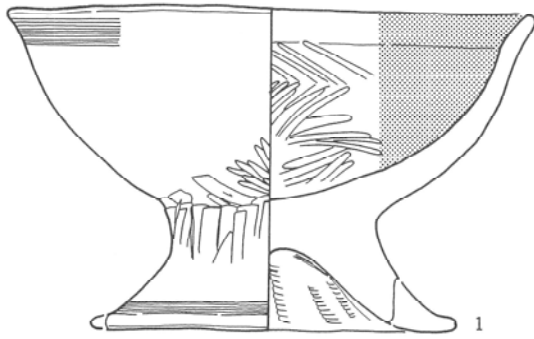
- 1 黒色シルト
- 2 暗褐色シルト
- 3 暗黄褐色シルト



- 1 暗灰褐色シルト
- 2 暗灰褐色シルト (黄灰色粘土混じり)
- 3 暗褐色シルト
- 4 暗灰褐色シルト
- 5 暗赤褐色シルト (焼土)
- 6 黒灰色シルト (灰層)
- 7 暗紫褐色シルト (焼土、かたくしまる。)
- 8 灰黄色シルト (焼土混じり)
- 9 黄灰色シルト質粘土 (カマド袖)



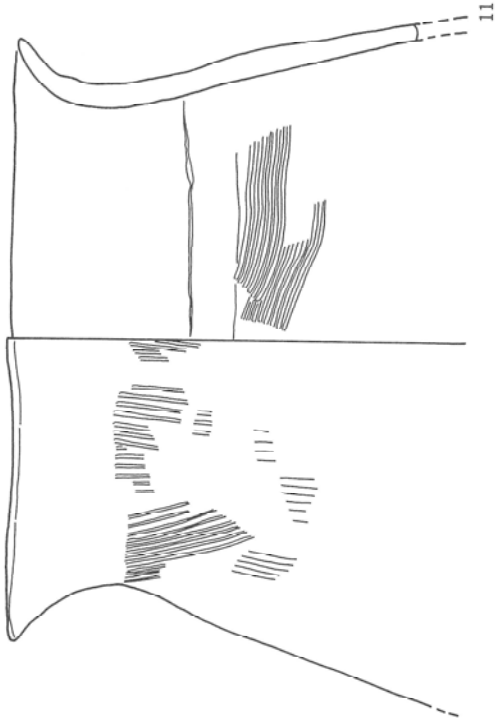
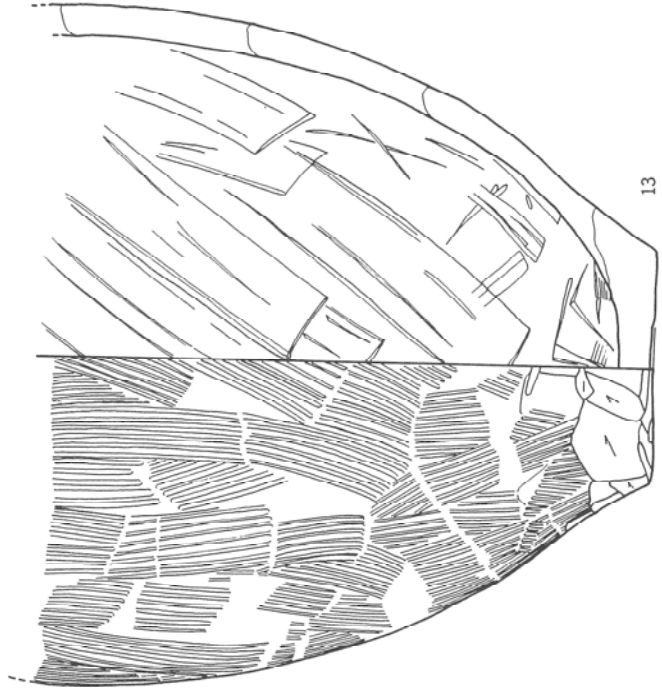
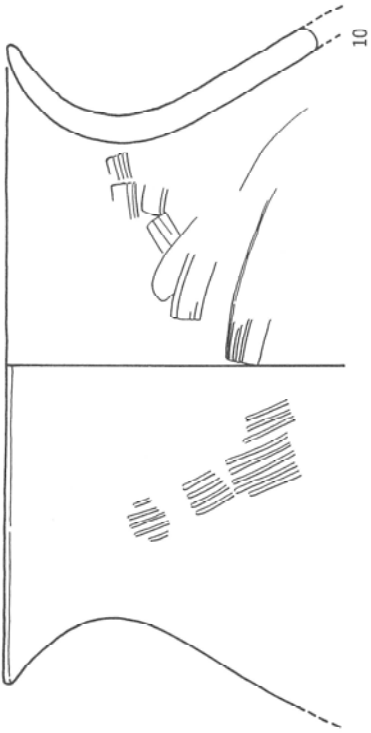
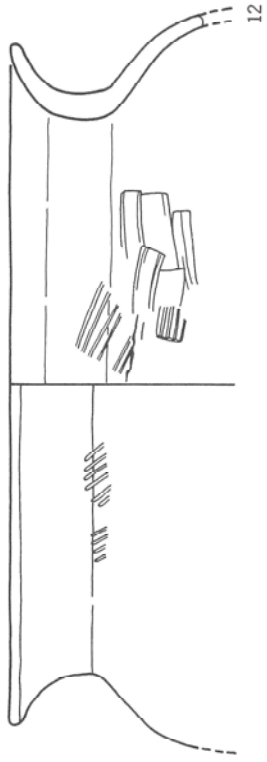
0 1 m



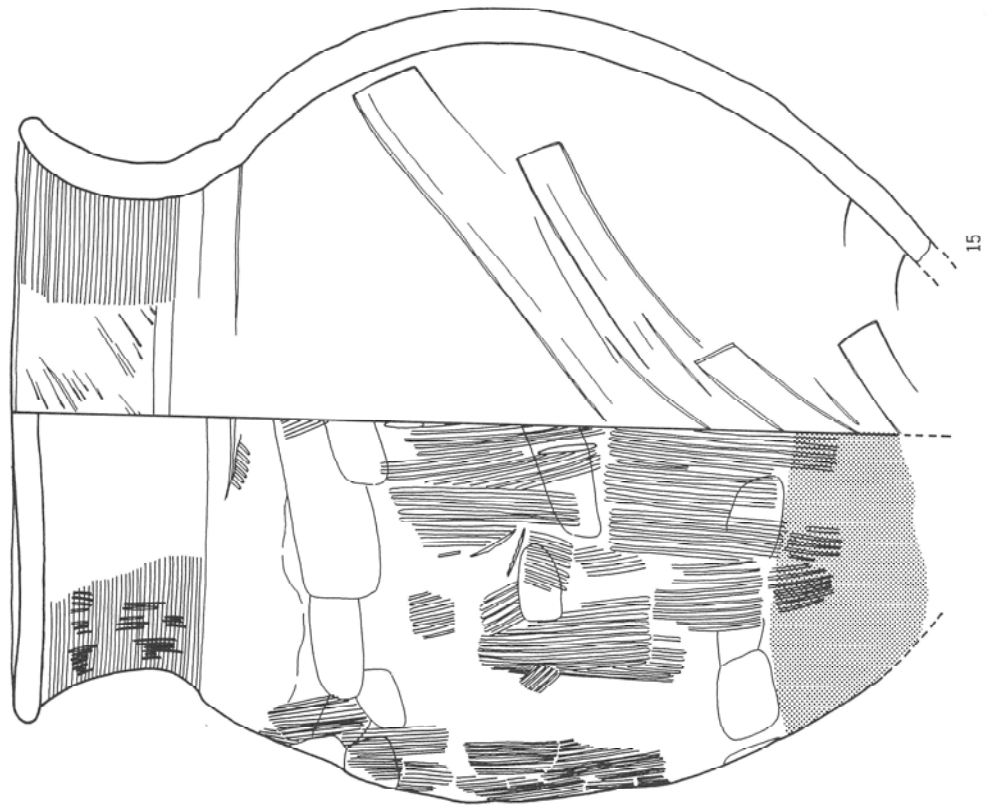
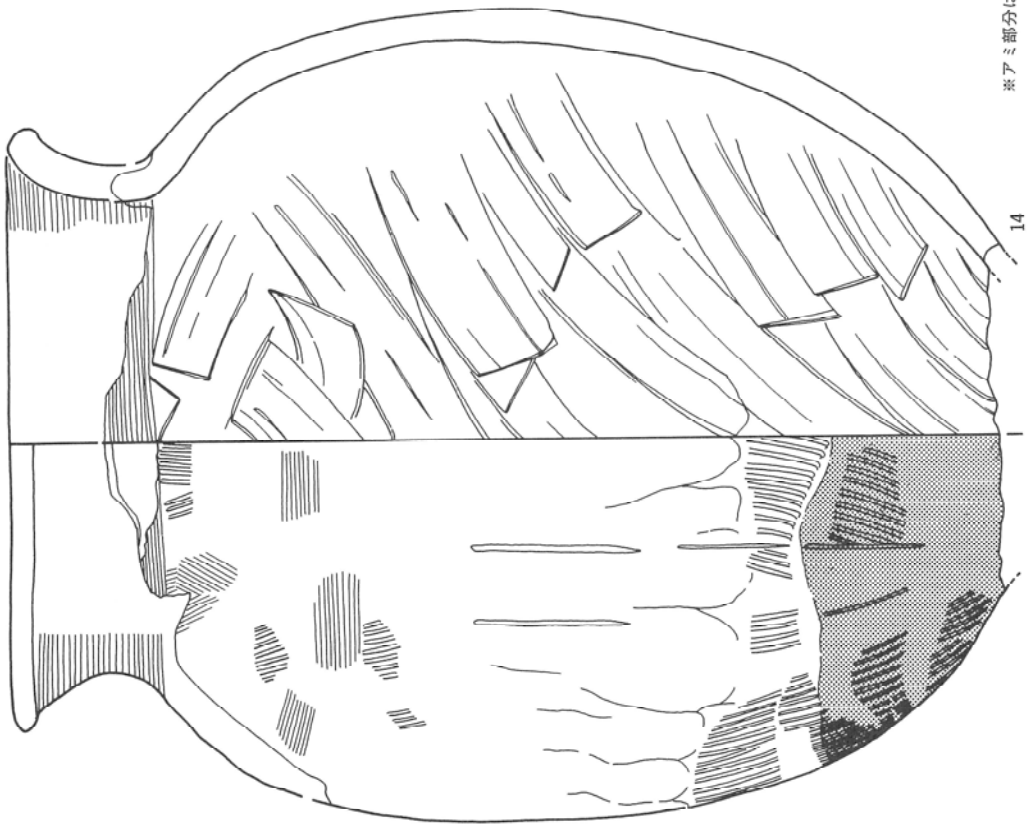
※ 环内面のアミは内黒を示す

0 5 cm

第7図 土師器実測図(1)



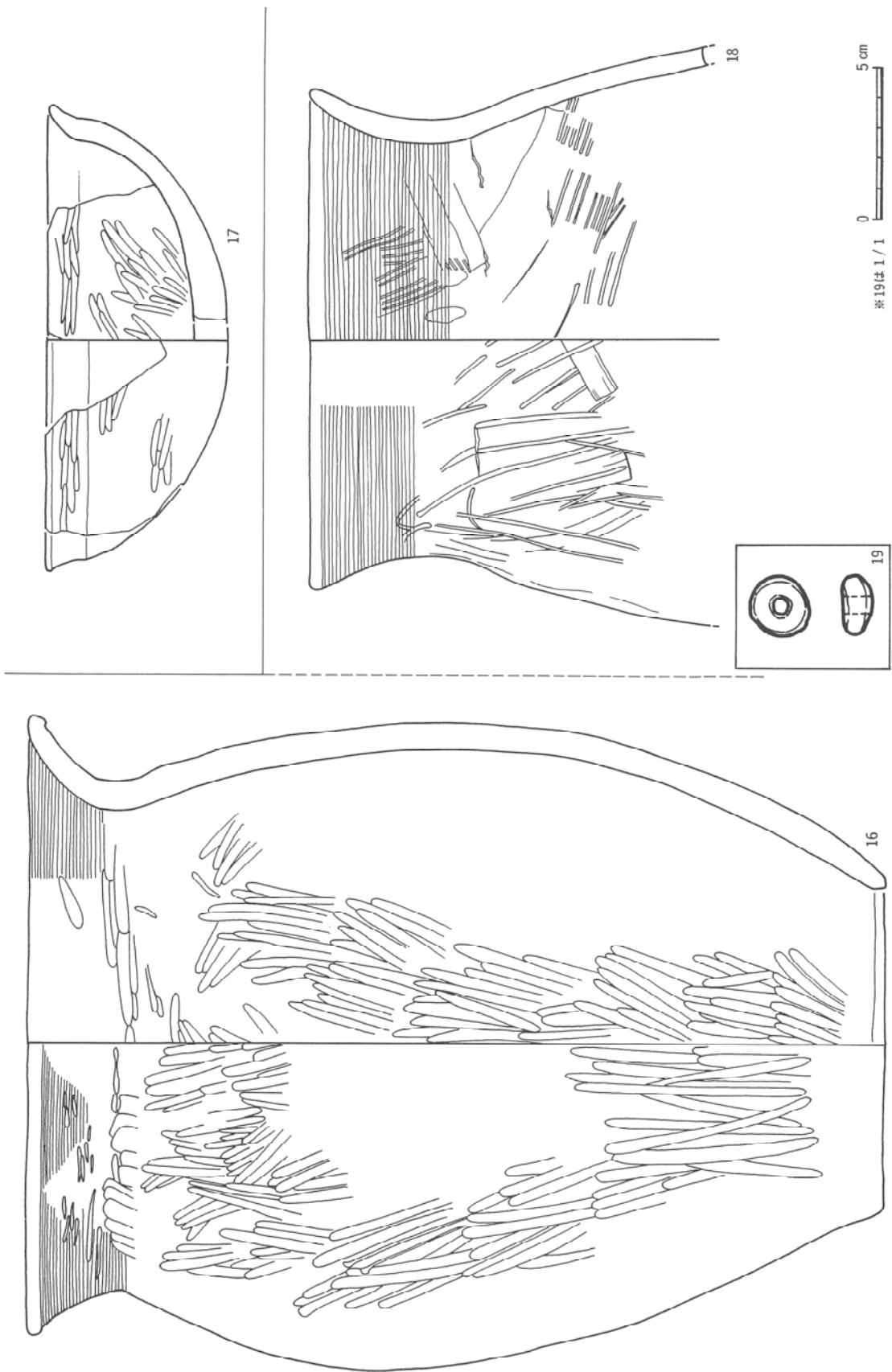
第8图 土師器実測图(2)



※アミ部分は加熱による赤変



第9図 土師器実測図(3)



第10図 土師器・小玉実測図(4)

表-3 遺物観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量(m/m)			色 調	胎土	調 整 技 法			出土地点	備 考
			口径	底径	器高			口 縁	体 部	底(脚) 部		
7	1	土師器高坏	140	—	85	5YR 6/6 橙 色	粗砂	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	ケズリ ナデ	ST1 (Y)	RP9(内黒)
	2	土師器高坏	(12)	—	(74)	7.5YR 6/6 橙 色	粗砂	ミガキ	ヨコナデ ミガキ	ケズリ	ST1 (Y)	RP6(内黒)
	3	土師器坏	143	—	50	7.5YR 7/6 橙 色	細砂	ヨコナデ	ヘラケズ リ?・ナデ	ケズリ ナデ	ST1 (Y)	RP20
	4	土師器坏	129	—	48	7.5YR 6/8 橙 色	細砂	ミガキ ナデ	ナデ ミガキ?	ナデ ミガキ?	ST1 (Y)	RP15(内 黒)
	5	土師器坏	124	—	56	10YR 7/4 にぶい黄 橙色	細砂	ヨコナデ	ナデ ミガキ?	ナデ ミガキ?	ST1 (Y)	RP19(内 黒)
	6	土師器坏	146	—	49	7.5YR 7/6 橙 色	微砂	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	ST1 (Y)	RP14(内 黒)
	7	土師器鉢	129	31	117	10YR 8/4 浅黄 橙 色	細砂	ヨコナデ (ヨコナデ)	ハケメ (ヘラナデ)	ケズリ (ヘラナデ)	ST1 (Y)	RP21
	8	土師器鉢	143	62	124	10YR 8/4 浅黄 橙 色	石英 細砂	ヨコナデ (ヨコナデ)	ハケメ (ヘラナデ)	ケズリ (ヘラナデ)	ST1 (Y)	RP15
8	9	土師器鉢	—	51	(40)	10YR 4/4 褐 色	細砂	—	ハケメ (ヘラナデ)	ケズリ ハケメ	ST1 (Y)	底部破片
	10	土師器甕	169	—	(82)	7.5YR 7/6 橙 色	細砂	ナデ?	ハケメ (ハケメ)	—	ST1 (Y)	RP10+11 二次焼成
	11	土師器甕	160	—	(107)	7.5YR 7/8 黄 橙 色	細砂	ナデ?	ハケメ (ハケメ)	—	ST1 (Y)	RP7 二次焼成
	12	土師器甕	179	—	(51)	7.5YR 7/4 にぶい橙 色	粗砂	ヨコナデ (ヨコナデ)	ハケメ? (ヘラナデ)	—	ST1 (F) ST1 (Y)	RP18
	13	土師器甕	—	61	(58)	10YR 4/4 褐 色	細砂	—	ハケメ (ヘラナデ)	ケズリ (ヘラナデ)	ST1 (Y)	RP8
9	14	土師器甕	159	—	(237)	10YR 8/3 浅黄 橙 色	細砂	ヨコナデ ナデヘラ	ケズリ ハケメ	—	ST1 (Y)	RP13
	15	土師器甕	161	—	(24)	10YR 8/3 浅黄 橙 色	細砂	ヨコナデ (ヨコナデ)	ハケメ (ヘラナデ)	—	ST1 (Y)	RP5
10	16	土師器甕	204	109	282	7.5YR 7/6 橙 色	細砂	ヨコナデ (ヨコナデ)	ミガキ (ミガキ)	ミガキ (ミガキ)	ST1 (Y)	RP17+18
	17	土師器坏	(13)	—	(59)	7.5YR 8/4 浅黄 橙 色	微砂	ナデ ミガキ	ミガキ (ミガキ)	ミガキ (ミガキ)	ST1 (F)	
	18	土師器甕	(14)	—	(13)	10YR 8/4 浅黄 橙 色	細砂	ヨコナデ (ヨコナデ)	ミガキ (ヘラナデ)	—	ST1 (F) ST1 + (Y)	

10図	19	丸平玉	長径 9(m/m)	重量 0.7(g)	5G 7/1 明緑 灰色	径3m/mの孔を穿つ丸平玉で全面丹念に磨か れている。	ST1 (Y)	RQ2
-----	----	-----	--------------	--------------	-----------------	--------------------------------	---------	-----

※注 法量での()は推定or残高,調整での()は内面,以下の表-4・5も同じ。

をはじめ,甕RP13と共伴のRP20(3),内黒で外面ナデ,内面ミガキを主な調整技法とし,ゆるい丸底を呈すRP14・15・19(4~6)の計5点がある。坏(17)については,精選された胎土,明るい色調,丹念なミガキ調整等の点で他と区別され,形態上でも口唇部の作り出しや口縁への立ち上がりが異っている。時期的に先行する型式の坏と見故されよう。非内黒の坏(3)を除けば,形態上の差は少なく,ゆるやかな丸底,口唇の短い外傾等に特徴が求められる。但し,坏(5)はやや口唇が肥厚し,器高が高い。鉢は,口縁部横ナデ,体部ハケ目,ヘラ削りの調整を持ち,最大径は体部中程からやや下部にある。甕は形態から,幾つかに細分可能と思われ,広口で丸味の強いもの(14・15),口縁が外反し,細身で紡錐形状となるもの(10・11・18),口縁が屈曲に富み,肩部に最大径を持つもの(12)等々を峻別できる。甕は,無底の甕形を呈し,丹念なミガキが施される(16)。

2 ST2 竪穴住居跡

〔平面形・重複〕 ST1を切る長方形プランの住居跡で,東西軸4.25m,南北軸3.27

m前後を計る。西南コーナーから南壁西半にかけては、性格不明の土壌SX5があり、壁および床面、ST2の柱穴EP11南半を各々切っている。住居の方位は、ST2の東西・南北壁の各走向ともST1に平行すると見故される事から同一と考えられる。

〔壁〕 検出された壁は、東辺がST1と同じレベルのIII層上面、ST1プラン内に係る北辺・西辺・南辺では、ST1の床面を各上端としている。従って、ST1と重複しない東壁部分での遺存が良く、壁高25cmを計る。他は、5～7cmで巡る程度である。壁の立ち上がり角度はややゆるい。

〔床面〕 ST2の掘り込みは、ST1の貼り床面を切り、ST1のそれより、5cm程下がる。床面はほぼ平坦で、全面に厚さ約5cmの灰黄色粘土が貼られて堅くしまる。南西コーナー付近では、SX5および攪乱により破壊されて遺存しない。

〔柱穴〕 柱穴は5個（EP1・2・10～12）検出された。北側のEP1・2，南側のEP10・11の4本を支柱にすると考えられ、さらに中央やや東よりにEP10の柱穴1個が認められた。EP1・2の東西軸では柱間2.4m，同EP11・12間2.2m，EP1・12の南北軸で1.8m，同EP2・11間で1.6～1.7mを各々計る。掘り方径は、EP1で55cm，EP2で35cm，EP10で35cm，EP12で55cmを各計る。なおEP11は、上面での土色変化を認めしたが、掘り方が浅かった故か明確にし得なかった。柱痕を確認できたものはEP1に限られる。

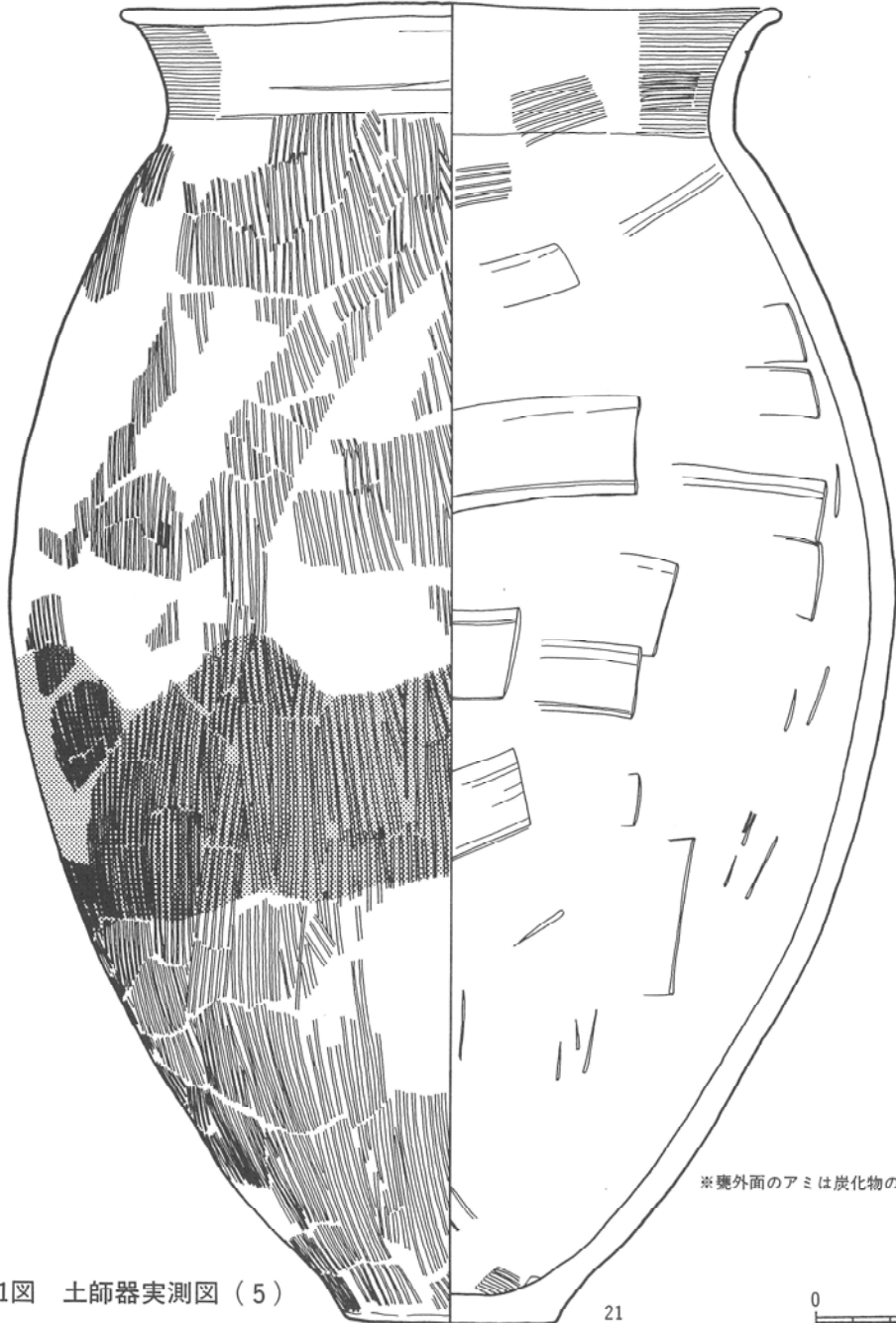
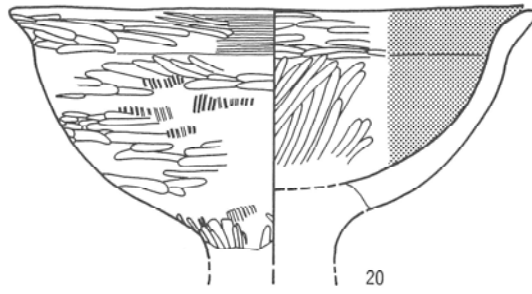
〔カマド〕 カマドは検出していない。貼り床上に焼土の分布も認められず、カマドや炉等の施設を当初から伴わなかったと考えられる。

〔堆積土〕 覆土は大別3層で、上部から黒褐色シルト、遺物をやや多く含む暗褐色シルト、床面上の均質な暗褐色シルトの層順となる。上部の黒褐色シルトは、遺跡域の基本層序II層に共通するものである事は先にも記した。全体的には、1層が住居中央部でやや層厚を増す他はほぼ水平な堆積状況を示し、2層が厚く、3層が比較的薄くなっている。

〔遺物出土状況〕 覆土内から甕や坏の破片48点、床面（大半は床直上）から51点の破片および、RPNaで登録した甕（RP3，他に別個体破片233点）、高坏（RP4）が出土している。覆土1層にはほとんど遺物を含まず、2層下部から3層にかけてその大半が含まれていた。登録遺物のRP3・4も、厳密には3層中に位置し、床面との間には若干のレベル差を認める。

〔出土遺物〕 復元し得た遺物は、上記の甕（RP3），脚部欠損の高坏（RP4）の2点である。その他、覆土の下部から床面にかけて出土した若干の坏類破片について断面実測を行なったものがあり、第16図に示している。

高坏（RP4）は、椀状に丸く立ち上がる体部と口縁部をやや強く外反させる形態を呈



※裏外面のアミは炭化物の付着部分を示す。

第11図 土師器実測図(5)

0 5 cm

表一 4 遺物観察表 (2)

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量(m/m)			色 調	胎土	調 整 技 法			出土地点	備 考
			口径	底径	器高			口 縁	体 部	底(脚)部		
11 図	20	土師器高坏	139	—	(63)	7.5YR 6/6 橙 色	微砂	ナデ ミガキ	ハケメ ミガキ	ハケメ ケズリ?	ST2 (Y)	RP3(内黒) 脚部欠損
	21	土師器甕	177	55	352	10YR 7/4 にぶい黄橙色	細砂	ナデ (ナデ)	ハケメ (ヘラナデ)	ハケメ (ヘラナデ)	ST2 (Y)	RP4

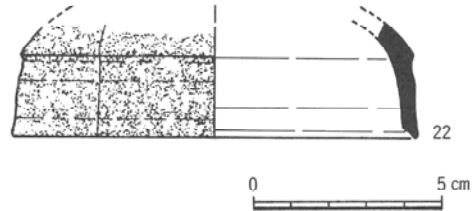
※注 (): 内面の調整

し、内面黒色化処理を施している。脚部は失われておりその形態は不明ながら恐らく S T 1 出土の高坏 (R P 9) 等に近いものと推測される。外面の調整では、横方向のミガキを主とするが、外反する口縁端部ではミガキ前段に横ナデを行なっており、ミガキはその上端部までは達していない(口唇までの上端部 4 ~ 5 m/m 部分にミガキを加えず、ナデ整形のまま残している)。体部ではミガキ単位の幅がやや大きく、所々に前段の縦位ハケメ調整を残す。脚柱との接合部では、ハケメ→ナデ付け様のミガキが観察される。内面では外反する口縁部分で横方向、体部から底部では方射状のヘラミガキが施されている。

甕 (R P 3) は、大形の紡錘形長胴甕で、胴部中央に最大径を持つ。口縁は、頸部から垂直近く立ち上がり、中程から外反して開く形態を示す。口縁端部は、強く外反して丸く収められ、玉縁様の縁帯を成す。外面の調整は、縦位ハケメが丹念に施されて前段の調整をほぼ覆うが、砂粒の移動から特に下半にあってはケズリ調整が行なわれた事が看取される。頸部から口縁では横ナデが見られ、内面にはヘラナデが入念である。

3 S P 3 柱穴様遺構

S T 1 の北東コーナー部の東壁を切る柱穴様の小ピットで、掘り方径 45cm、深さ 25cm を計る。土層の観察からその中央に柱痕状の土色変化を認め、掘り方覆土内より右図に示す須恵器の蓋小片を検出した。外面には自然釉がかかり、所々に小さな火跳ね状の剝落がある。肩部の稜は明瞭で、口唇は垂直に近くのみ、その端部は直線的な傾斜を持つ。内面には、ロクロナデの調整を認める。



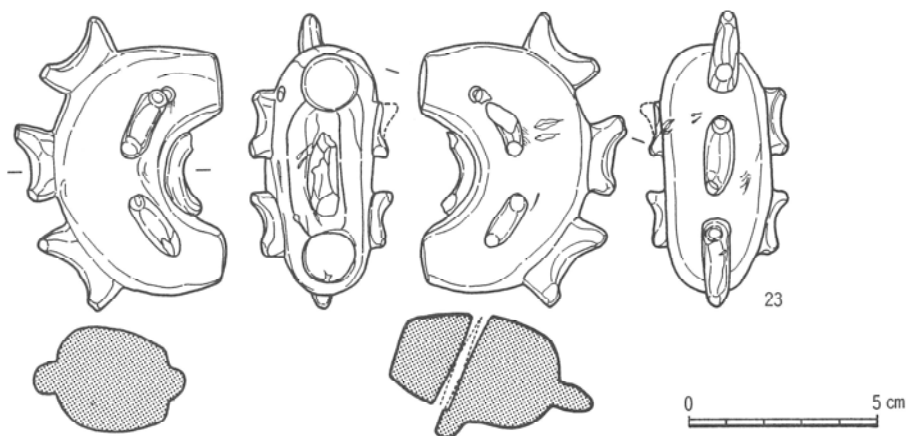
第12図 須恵器実測図

表一 5 遺物観察表 (3)

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量			色 調	胎土	特 徴	出土地点	備 考
			口径	底径	器高					
12図	22	須恵器蓋	(107)	—	(30)	5B 7/1 明 青 灰 色	細砂	外面に灰を蒙る。肩部の段はやや強目、口唇にはない。	SP3 (F)	口縁部破片

4 S P 4 柱穴様遺構

S T 1 のカマド東側床面を切る柱穴様小ピットで径 45cm の円形を呈す。深さ 35cm で壁の立ち上がりは急傾である。覆土は、柱痕と考えられる黒色シルトを挟んで 2・3 層の掘り方埋め土を認め、3 層は固くしまっている。遺物の出土はない。ピットの形態、覆土、柱痕といったあり方から S P 3 との関連が捉えられ、その距離は 2.25m を計る。



第13図 子持勾玉実測図

表一6 遺物観察表(4)

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量			色 調		特 徴	出土地点	備 考
			全長	全幅	重量					
13図	23	子持勾玉	78 (m/m)	41 (m/m)	118.9 (g)	7.5GY 緑	5/1 灰 色	肉厚で丸味の強い形態を呈す。整形時の擦痕は研磨されて顕著でない。	遺構外II層	RQ1(完形)

5 S X 5 性格不明土壌

S T 2 の南西コーナーから南壁にかけて位置し、S T 2 の覆土から床面、南壁中程の一部を切る。形状は、東西方向に長軸を取る不整の長方形で、その北東部を現代の攪乱（梨木の吊り棚）により切られている。覆土は、S T 2 住居の2・3層の攪乱と見られ、上部に1層を薄く乗せる事から、それ程時期的に降るものでない事が分かるが、出土遺物がなく判然とししない。東西軸2.5m、南北0.6~0.8mを計る。

6 遺構外出土遺物

S T 1 住居跡他遺構を検出するまでの段階で出土した遺物は、小片の土師器若干と第13図に示す子持勾玉1点である。出土地点については第4図に示したが、S T 1 住居跡の南西コーナー付近、同住居西壁に近い住居プランの外側である。出土層位は、II層下部~III層直上面にかけてであり、当時の生活面上かとも考えられたが、時期決定に至る根拠を持たない。なお、高速道路用地部分の第1次調査では、一辺約10mの方形プランを有す竪穴住居跡（S T 9）床面直上で子持勾玉1点が出土しており、本遺跡では2例目となる。

子持勾玉（R Q 1）は、緑灰色を呈す緑泥片岩を素材にすると考えられ、やや硬質で脂沢がある。全体に豊満な作りを示し、右側面上部の子玉、胴部の子玉に若干欠損を認める他、ほぼ完形である。形状は、断面が楕円形を呈し、腹部に1個、背面に3個、両側面に各2個の子玉を持つ。子玉は、背面のもので全長2.1~2.4cm、左側面で1.8~1.9cm、右側面で、1.6cm、腹部で約2.1cmを各計り、本体の全長は7.8cmである。

製作はていねいで、材質も良好な事から仕上がりも良く、整形時の擦痕はそれ程顕著でない。但し、子玉部分や腹部等で調整時における細長いアタリを示すケズリ痕跡を残す部分が認められる。穿孔は側面上部の子玉端に施されるが、1度失敗して対面の子玉上端に至り、再度やや斜行させてやり直し貫通させた様子が窺える。

V 考 察

1 遺構について

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡2棟、柱穴様ピット2基、性格不明土壇1基の他、住居に関連するカマド、土壇、柱穴等が検出された。従来の調査例では、本遺跡の第1次調査で検出された竪穴住居群以外に比較すべき同期のものではなく、6世紀代の住居構造を知る上では貴重なものとなる。以下では、主にST1の住居構造を概観し、隣県特に福島県域での成果から類例検討を行なってまとめとしたい。

住居構造

ST1は、1辺が6m強の略方形プランを持つ住居跡で、福島県佐平林（I～IV区・VIII区）遺跡の12例にてらせば大型の部類に入る。ST2は、長軸4.25mを計る長方形プランの住居跡で、やや小型と言えよう。但し、6世紀代の住居例では、長方形企画のものが一般的な存在ではないようで、本遺跡の第1次調査でも特殊な事例と見られた大形の住居跡1棟に限られている。床面は、両住居ともに貼り床であるが、ST1の西壁～南壁沿いには認められず、地山をそのまま床面としていた。

柱穴は、対角線上に配置される4本柱を基本にしていると考えられるが、ST1では重複のため不明な部分が残る。掘り方は、ST1で径60～70cm、深さ20～30cmと大型で、ST2では径35～55cm、深さ15～25cmと小ぶりになる。一部で検出された柱痕の規模と比較すれば、総べてではないにしろ柱材に倍する規模の径で掘り込まれていると判断される。

カマドは、ST1の1基だけである。住居北壁の中央やや西側に構築されたもので、壁外へ張り出す煙道はなく、カマド奥壁と住居の壁が一致している。すなわち、「大半は煙道部を含めて住居跡内に取り込まれている。」「恐らく6世紀前半のカマド類型のなかでひとつの典型的な形態……」と考察された薬師堂遺跡_{庄10}での成果に合致し、更に加えれば、薬師堂1・3号住居例より佐平林7・21号住居例等に近いであろう。

土壇は、カマド西に隣接するEK6、住居北西隅のEK9があり、特に前者は佐平林の報告で言われた有堤ピットに類するものである可能性が強い。事実調査時点では固くしまったり貼り床面より上部にやや軟質の白色粘土層の部分的盛り上がり認めている。

以上、主としてST1の1棟と言う限られた事例から安易短絡な比較検討との誇りを免れないが、住居構造の特徴的な諸点で佐平林遺跡および薬師堂遺跡例等に近似すると見做される。しかし、山形県域における当該期の住居検出例では初出のものであり、第1次調査での成果と他資料の増加を俟って更に分析と検討を進める必要があるだろう。

2 遺物について

遺物は、ST1・2住居跡の床面および同直上からまとまって出土している(表一1)。以下では遺物の分類、出土状況と共伴関係、器種組成等の諸点から検討を行ない、遺物群の編年的位置付けと地域的特性の明確化を試みまとめとする。

土師器の分類

土師器の器種には、高坏・坏・鉢・甕・壺・甑の6種があり、器種組成の大方を知ることが出来る。なお分類にあたっては、破片資料から形態の窺えるもの、器種の存在を認めながら復元不能等から資料化し得なかったもの等若干を加えた。

高坏(A)は、脚と坏部の形態から4類に細分できる。

A1類 脚高があり開脚度の少ない中空の形態を示すもので、坏部は非内黒の平底と考えられる。胎土精良で緻密であり、内外面のミガキ調整が丹念である。EK9土塘覆土内出土のもので、脚部の破片資料(第14図1)1点に限られる。

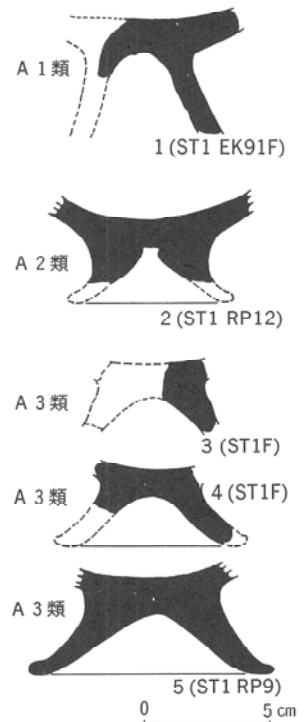
A2類 坏部は内黒・丸底で全体に丸味の強いやや大ぶりの形態を呈す。脚部は坏部の割合に比較して小さく、厚目の粘土帯が短径で接合された後強く引き出されて短く開く。脚裾は接合部分に較べて極端に薄いと考えられる。断面形は円錐台状の中空を呈し、内面の接合部は調整を加えないまま残している(第7図2)。

A3類 坏部はA2類にほぼ共通するが、口縁端部の短い外傾に特徴が見られる。脚部は接合部・裾部の径ともに大ぶりで、断面形山形状の中空を呈す。脚裾の端部は、短く引き出されて丸く収められている(第7図1)。

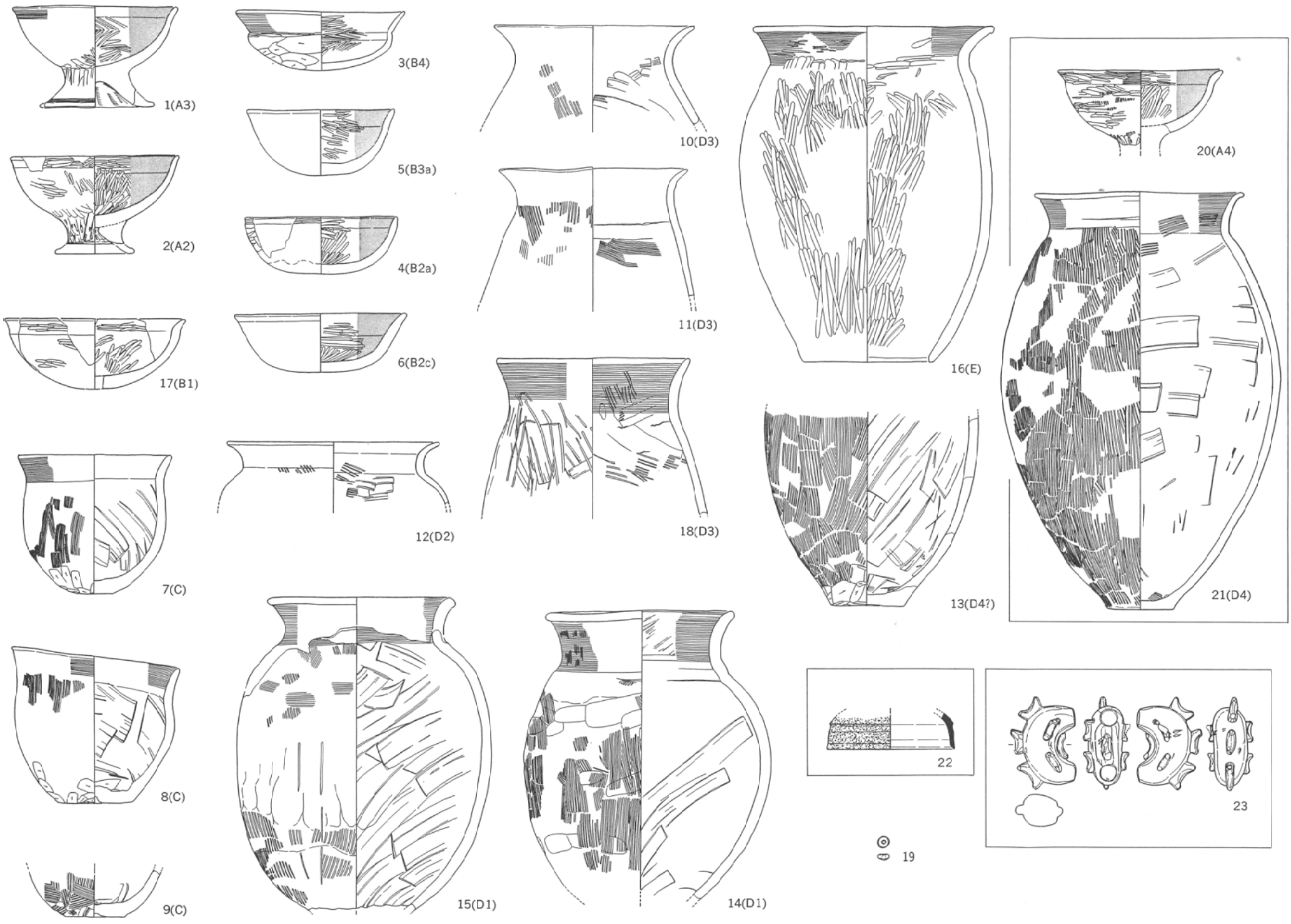
A4類 坏部は形態的に見てA2・A3類に近いが、全体に厚手の作りを示す。口縁端部は内側が肥厚気味で、やや外反する。底部は丸底で内面黒色化処理が施される。脚部は、接合部しか残らず不明ながら、上部に短い中実の円柱部を持つと見られ、脚の中程から大きく開く形態が想定される。脚部の断面形はA3類と同様であろう(第11図20)。

坏(B)は、体部の屈曲や口縁端部の形状から5類に分類され、さらに口縁端部の形態より細分される。

B1類 底部域の狭い丸底で、体部の内反が強い形態を呈す。口縁端部は、内削ぎ状の外傾を示す。内外面のミガキ調整が丹念で、胎土精良、浅黄橙色の明るい色調を持つ(第10図17)。ST1覆土内出土の破片資料1点に限られる。



第14図 高坏脚部断面

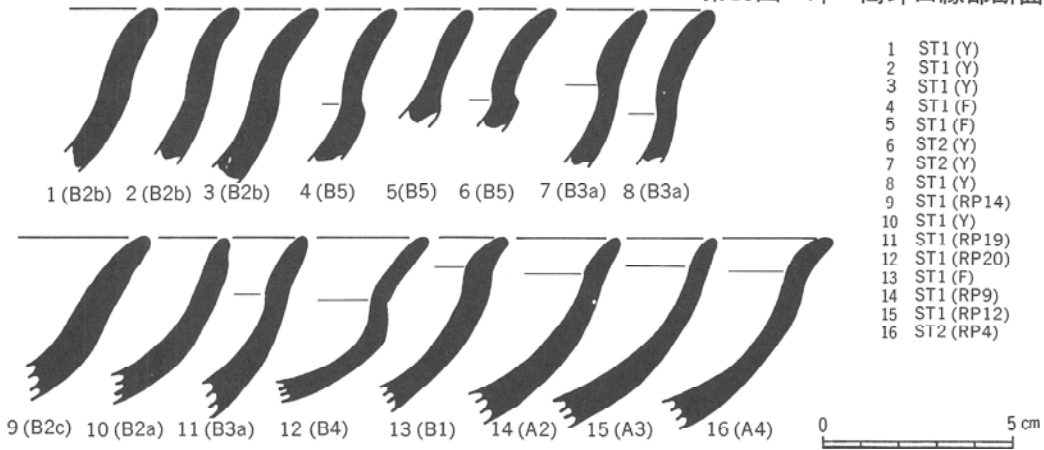


1~16・18・19: ST1 床面
 17 : ST1 覆土
 20・21 : ST2 床面
 22 SP3 覆土
 23 ST1 西南コーナー外

0 10cm

第15図 遺物集成図 (1/4)

第16図 坏・高坏口縁部断面



B 2 類 平底に近いゆるやかな丸底を呈す形態で、器高は他と較べて低い。全体に厚手、暗い色調、内黒、口縁端部のヨコナデ、体部ナデ調整等に特徴が認められ、量的なまとまりを持っている。これらは、主として体部の立ち上がりや口縁部形態等の違いから以下の a～c に 3 細分される。(a) 内反して立ち上がる体部からそのまま口縁部に至るもので、端部を短くつまんで横ナデ整形を加えるもの (第 7 図 4)。

(b) 口縁を弱く外反させて開くもの (第 16 図 1～3)。(c) 口縁が外傾してやや大きく開くもの (第 7 図 6)。

B 3 類 身の深い丸底形態を呈し、口縁端部が肥厚して外反する特徴をもつ。肥厚の度合や長さから a～b に 2 分できる。(a) 肥厚が下脹らみ状を呈し、その度合がやや強いもの (第 7 図 5, 第 16 図 7・11)。(b) 体部上端からくびれて内屈し、厚みを増した長めの口縁が弱く外反するもの (第 16 図 8)。

B 4 類 ゆるやかな丸底の底部から短く直上して立ち上がる体部をもつもので、口縁部は直線的に外傾して開くもの。口縁と体部上端のくびれ、体部下半のにおい段等屈曲ある形態に特徴が求められる。外面の調整では口縁部横ナデ、体部～底部にかけてのヘラケズリを認め、内面ではヘラミガキが入念である (第 7 図 3)。非内黒。

B 5 類 完形品および復元実測をし得たものがないため全形は不明であるが、身の深い丸底の形態を示すと考えられ、体部上端ないし口縁部との境に明瞭な逆「く」字状の段を形成するもの。口縁部は、段を境として一旦内屈してくびれ、中脹らみとなって外反する。いずれも口縁部横ナデ、内面ヘラミガキ調整を認め内黒である。

以上坏では B 1～B 5 類に分類され、B 2・B 3 類で各々細分できた。高坏の坏部との関連を見れば、A 2 類と B 1 類、A 3 類と B 2a 類、A 4 類と B 3 類の相関が高いであろう。

鉢（C）は資料化し得たもの3点で内1点は底部破片である。これらは、法量・形態・調整技法の諸点で大差を認めない事から一括して扱う事とし分類は行なわない。器高12cm前後を計る小型のもので、小さな底部、丸味の強い体部形状、頸部で一旦くびれ、外傾して開く口縁部形態を特徴とする。最大径は口縁部にあり、体部の脹らみはその中程からやや下部にピークをもつ。調整では口縁部の横ナデ、体部ハケメ、同下半のヘラケズリ、体部内面のヘラナデがほぼ一様である。底部はやや厚味のある平底で、中央に凹部をもつものがある（第7図8・9）。意識的なものと判断される。

甕（D）は主として形態的特徴から以下の1～4類に細分される。

- D 1類 体部球形ないし^{なつめ}玉状を呈す形態をもつもので、口縁は直上気味に短く外反する（第9図14・15）。体部下半には二次的加熱による赤変を認める。
- D 2類 肩部に最大径をもち、直上して立ち上がった口縁が中程から強く外傾して開く形態を呈すもの（第8図12）。体部・底部の形状は欠損のため不明である。
- D 3類 体部中央付近に最大径を有す長胴の甕と推定されるもので、内傾して頸部に至る体部上半と、外反気味に開くやや長い口縁部に特徴が見られる。調整では、口縁部横ナデ、体部内外面のハケメ等を主要なものとしている。頸部での口縁と体部の境界は、調整手法での差異として認められるものの、明確な段などの形成はない。これは他の甕・鉢などの器種でも同様である。（10・11）は、二次的加熱を受け器面脆弱となっている。
- D 4類 体部中央に最大径を有し、紡錘形状の長胴形態を呈す。口縁部は、直上気味に外反し、その端部がさらに外側へ強く反って玉縁状の沿帯を成す。調整は、口縁部横ナデ、体部ハケメ、体部内面ヘラナデを主要なものとし、体部外面の丹念なハケメ調整が特徴的である（第8図13、第11図21）。

甕（E）は、胴部が脹らむ形態を呈す無底式のもので、口縁が強く外傾して開くもの1点に限られる。調整は口縁部横ナデの他は内外面ともに入念なミガキが施されている。全体的な形態では甕D 1類に近い。胎土良好、焼成も堅緻である（第10図16）。

壺（F）は、RP16として登録した体部下半から底部にかけての資料1個体が存在する。攪乱により上半部の大方を欠失したと思われる、さらに下半の接合も不可能なため図化し得なかった。但し、底部・体部径ともに図示し得たもの以上となる事は確実であり、大型で体部球形の形態を示すものと推測される。体部外面にはハケメ調整を認める。

土師器の共伴関係と器種組成

出土状況の概要については先にも記したが、住居跡における器種組成を明確にする目的から検討を行ない、出土土師器の単位群としての把握とその先後関係の大枠を捉える。

第Ⅰ群土器 主としてST1の覆土下層部に入り込んだ胎土・焼成ともに良好で明るい色調の一群がある。これらには、高坏A1類・坏B1類各1点と口縁がやや外傾し体部の脹らむ甕口縁部破片等若干が含まれ、形態・技法等の諸点から見て以下の第Ⅱ群土器に先行するものと判断される。量・器種的なまとまりはない。

第Ⅱ群土器 ST1の床面ないし直上から出土したまとまりある一括性の高い土器群である。その出土状況は第4・5図に示したが、一部取り上げ時の不手際からその帰属を明確にし得ないもの(第14図4・12・18)があった。共伴の確実なものには、高坏A2・A3類、坏B2c・B3c、鉢(c)、甕D1・D3類、甗(E)、壺(F)の各器種各類型が上げられる。また、これらに共伴の可能性あるものとして坏B2a・B2b・B3b類、甕D2類がある。甕D4類(第14図13)については、上半の形態が不明であり、甕D3類となる可能性もある事から除外すべきと考えられる。

第Ⅲ群土器 ST1を切るST2では、高坏A4類と甕D4類の共伴が確実である。また、床面上として取り上げを行なった破片資料中には坏B5類を中心に同B3a類が認められ、共伴の可能性が高い。坏B5類はST1の覆土中にも見られたが、少なくとも第Ⅱ群土器中に組成される事はないと言える。坏3a類はⅡ群土器中の組成にも認めたが、口縁の肥厚度や胎土・色調等で第16図7等の第Ⅲ群土器とは区別すべきとも考えられる。

土器群の編年的位置

これまでの検討から本遺跡出土土器は、第Ⅰ～Ⅲ群に区別すべきものである事が明らかとなった。また、形態および技法上の特徴と遺構間の重複関係からは、第Ⅰ群→第Ⅱ群→第Ⅲ群土器への変遷が捉えられ、特に第Ⅱ群土器のまとまりとその大方を知り得たと考えられる。以下ではこれら土器群の編年的位置づけについて考察を行なう。

第Ⅰ群土器

高坏A1類・坏B1類他体部球形と推測される甕等から組成される一群で、これらの形態的特徴から見て南小泉Ⅱ式註11に比定される。県内の当該遺跡では、米沢市八幡原No.5遺跡註12、南陽市沢田遺跡註13、山形市谷柏遺跡註14、東根市扇田遺跡註15、尾花沢市八幡山遺跡註16等がある。この中で、八幡原No.5遺跡(1～4号住居跡)、沢田遺跡(5・6号住居跡)では竈穴住居に伴う良好な一括遺物が得られている。細部の検討は除くが、両者の概括的比較からは、複合口縁的な要素を残す沢田遺跡例と、坏形態の多様化・甕類の長胴化傾向を認める八幡原No.5遺跡ST2例では時間的隔差が存在し、その段階を異にすると判断される。すなわち前者はより前型式の特徴を残存し、後者はより新しい要素へ連なる特徴をもつと見做されよう。本遺跡第Ⅰ群土器は、器種的・量的にごく限られるためこれらとの比較検討が困難である。坏B1類の形態に限って見れば、より八幡原No.5遺跡に近いものと推測される。

第II群土器

高坏A2・A3類、坏B2c・B3c類、鉢(C)、甕D1・D3類、甗(E)、壺(F)、の各器種各類型から組成される一群で、さらに坏B2a・B2b類、甕D2類が加わる可能性が強い。県内の当該期遺跡では、山形市天神山遺跡^{註17}、同嶋遺跡(ごく一部資料?)、同お花山古墳群、鶴岡市矢馳遺跡^{註18}等が上げられる。天神山遺跡は祭祀遺跡であり昭和46年に第1地点、昭和48年に第3地点の調査^{註19}が行なわれ石組遺構等に伴う一括性の高い土器群が得られている。特に昭和46年度の調査で出土した土師器の一群は、器種組成においてまとまりをもち、一括性も高かった事から小野忍氏より山形盆地の土師器編年第III型式に並行する「天神山式」の提唱が行なわれ、東北南半の第三型式「引田式」に比定できるとされた。

お花山古墳群は、東北横断自動車道の建設に係る事から昭和57・58年の二ケ年にわたって調査が実施され、24基の古墳が検出された。古墳主体部や周溝からは、器種的偏りはあるものの副葬品としてあるいは葬送儀礼に関連して捉えられる一括性のある大別4群の土器群が認められ、本遺跡第II群土器の位置づけを行なう上では現時点で最も有効な資料と考えられた。嶋遺跡・矢馳遺跡の土器群は研究史上、資料上の価値は高いが、両者の一括性、後者の地域性の問題が残るため、ここでの比較対象からは除外する。

お花山古墳群では、1・4・8・13・14号墳から高坏・坏・甕等を主な器種として組成する土器群が検出された。これらは相互の型式学的検討や古墳間の重複関係から、14号墳関連のA群、4号墳のB群、1・8号墳のC群、13号墳のD群として大まかに捉えられ、福島県での成果他に照してA→D群への変遷と把握される。そこでは、内黒坏が盛行する前段に位置づけられた佐平林式と対比できるB群土器の存在に意義があり、西原・上高野遺跡^{註20}→薬師堂・舞台遺跡^{註21}と続く福島県での様相にそれ程隔差のない本県域(主として内陸部山形盆地以南か。)^{註22}での土器群のあり方と変遷が想定された。

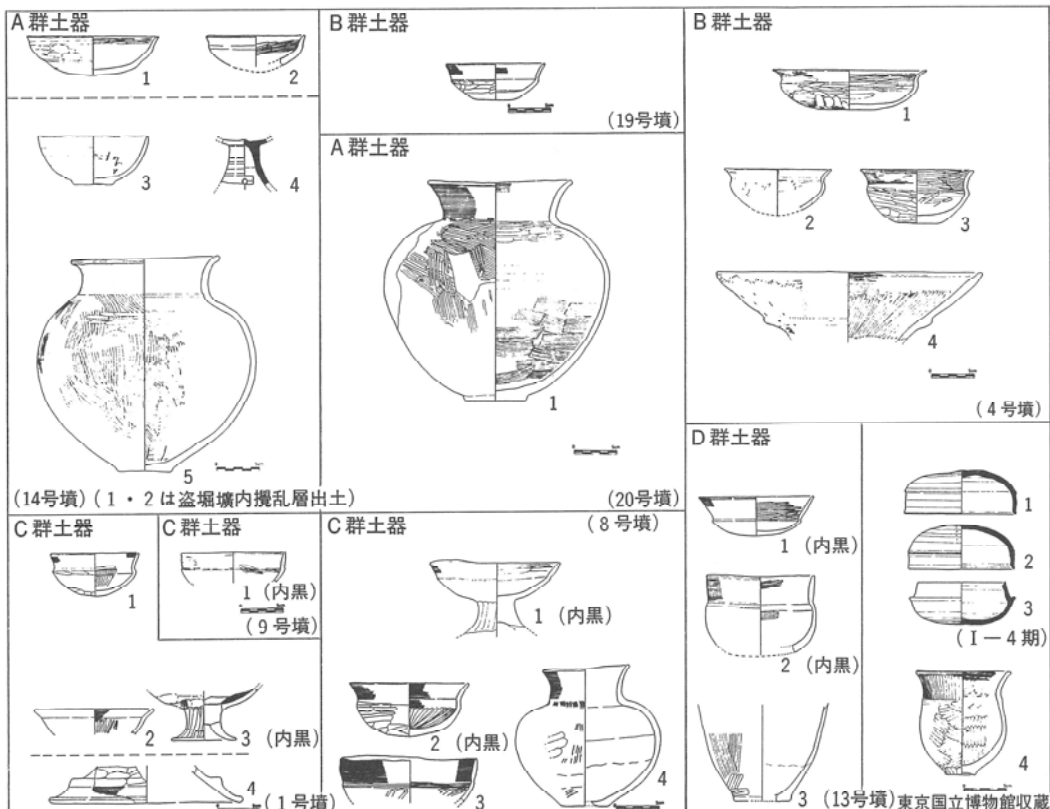
本遺跡第II群土器との比較では、高坏A2類の脚部形態等からC群との相関が強いと看取され、佐平林式に比定できるB群に含まれるかあるいは黒色化处理の点から後続するものと判断される。A群との比較では、甕の形態で類似するとも言えるが、本群の甕D1類の張りはA群程に顕著でなく、むしろ佐平林式の様相に近いと見做される。また、甕D3類の形態に似る長胴の甕D2類が共伴でかつ主体的なあり方を示すことから、佐平林式よりは後出のもので、一部に古い要素を保持していると考えられる。

一方、A群中には平底で椀状の形態を呈す坏が存在するが、本群中には平底形態を認めていない。同様の類例は本屋敷古墳群第3号墳^{註23}から出土しており、本文での年代観とほぼ一致する5世紀後半代の年代が示唆されている。従ってA群にB群が後続することはまちがいでなく、さらにB群がC群(第II群土器)に先行するであろうとの見通しが立てられた。

B群は、佐平林式の坏A II・A III・B I類に各対比できる坏3点にすぎないが、いずれも非内黒で調整の丹念なものである。(なお、1号墳の4は他と出土状況が異なり除外する。)佐平林式中の坏A・B以外の類型を欠くものの、以下で述べる天神山式と本遺跡第II群中には坏A・B類が含まれていない事から見てその隔差は大きいと考えられる。

D群との関連ではどうであろうか。D群は身の深い有段で口縁が長めに外傾する坏、頸部で括れ口縁がやや中脹らみ状に肥厚して直上気味に開く坏、体部の脹らみがあまりない長胴の甕等を組成とし、お花山古墳群では古墳間の重複(19号(旧)→13号墳(新))関係からB群以後である事が確実である。本遺跡での分析では有段坏B 5類は第II群中には含まれず、第III群以降に組成されると判断できた事からC群すなわち第II群に後続する事はまちがいない。これらの一群は従来の見解に立てば「住社式」^{註1}の範中で捉えられるであろうから、本遺跡第II群土器は住社式以前、佐平林式以後としての編年的位置づけが可能となる。

次に、本県内ではもっとも本群に共通性の強いと考えられる天神山遺跡第1地点出土土器群との比較を行なって見たい。器種組成では、高坏・坏・鉢・甕・甑のほぼ完備された内容が知られ、出土状況からしてその一括性が保証される土器群である事は先にも記した。本第II群との比較では、坏B 2a・B 2b・B 3a・B 3b類、甕D 3・D 4類等多くの類型で



第17図 お花山古墳群出土の土師器

東京国立博物館収蔵のお花山古墳群出土遺物

共通する要素を看取でき、坏類での黒色化処理の出現^頻度も本群同様に高い。鉢では、底部が角ばり、体部が外傾して立ち上がるものがあり、他と比較してやや後出的要素と推測される。甗では、相互に該当する類型を欠く事から検討が不可能であるが、小型の単孔式類型では、本群鉢（C）に非常によく似た形態の特徴が認められる。以上を概括的にまとめれば、天神山遺跡の土器群は、主に坏・甗の類型で共通性が大きく、鉢・甗の器種に共通するものと、本群中には組成が認められない類型が存在すると見做すことができるが、大枠では同時期の所産と考えて大過ない。すなわち、天神山式と本群が並行関係にあると考えられ、相互に古い要素や新しい要素を含む等の若干の相異がある。

最後に、地理的な隔りは大きいですが、天神山式と佐平林式との関連について検討する。天神山式の坏類型は、その大半が佐平林式の類型に含まれ、佐平林式の坏C I・D I・E I・E II・F・G類に無理なく対比できるが、天神山式では内黒のものが多いこと、坏A・B・H・I類を欠くこと等が注意される。また、高坏・鉢類での類似性は認めるが、甗・甗類での形態的共通性は少ないと見做される。一方、技法的な面では、佐平林式の坏類での黒色化処理がほとんど認められないこと、整形手法でナデ調整が主体となる等の特徴がある。天神山式土器・本群では、内黒坏の多出とハケメ調整が主体的な在り方を示し、その技法・手法的差異は顕著である。以上のことから、すなわち共通性も認められるが、相異点も大きいと見做されるべきであり、内黒坏の出現時期と地域差、全体としての土器型式の先後関係を含めて検討すべきことがらと思われた。しかし、本文では、お花山古墳群で検出されたB群土器の存在と、各遺跡間の比較検討から福島県域との様^相に隔差ない土器群の変遷が想定されるとの見通しをもっており、内黒坏に関してもその出現時期や地域差について論述し得る根拠ある資料をもちあわせていない。むしろ、佐平林式の坏類型の中でもやや古相のA I・A II類を本群や天神山式に見い出せないこと、鉢・甗・甗等の類型に形態的隔差が大きいことから時間差の問題であろうと推測される。この事は、先のお花山古墳群のB・C群と佐平林式、本第II群と佐平林式の比較検討でも同様な結論を得ており、その限りでは佐平林→（+）→薬師堂・舞台式、お花山古墳群B群→C群（本第II群・天神山式）→D群の変遷が考定できる。また、手法的な差異については、その前後の土器群をも含めて勘案すれば地域差と考えられ、本域での大型器種に占めるハケメ調整は、时期的に多少の異動を認めるものの一貫して主体的なあり方を保持すると言える。

以上の分析と検討からは、佐平林式に続くとされた薬師堂・舞台式との比較検討が必ずしも充分でないが薬師堂・舞台式が住社式並行と捉えられる事からすれば、本文中での検討から明らかなように、その間にはより連続性が辿れる土器群の介在を想起すべきと考えられた。この場では直接的な比較分析の対象として取り上げなかったが、佐平林遺跡(VIII)

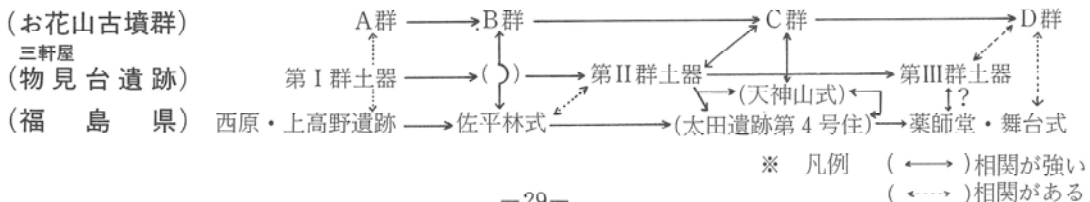
の報文中で指摘された郡山市太田遺跡4号住居跡・舞台遺跡12号住居跡出土の土器群は、^{注26}佐平林式土器以上に形態・技法上の特徴で本第II群土器に近いものであり、^{注27}並行関係にある土器群と見做される。またこれらを介在させる事で有段の坏や黒色化される坏類の出現頻度が高率化する薬師堂・舞台式への関係が無理なく一連のものとして把握できるのではないかと考えられる。従ってその限りでは、佐平林式→(太田遺跡4号住居出土土器群)→薬師堂・舞台式の編年の序列が想定されよう。これら土器群の年代については、佐平林式土器が6世紀前半、薬師堂・舞台式土器が6世紀中葉～後半代が各考定される事から見て、6世紀前葉～中葉、具体的には6世紀中葉代の年代が推定される。

第III群土器

高坏A4類・坏B5・B3a類・甕D4類の組成が考えられるもので、住居の重複から確実に第II群土器よりは後出の土器群と捉えられた。しかし、有段の坏B5類他坏類で復元できるまでの資料に乏しく、また鉢・甕等の器種の欠落も大きい事から器種組成の内容は必ずしも明らかでない。従って第II群土器他との比較検討も部分的とならざるを得ないため、ここでは細部の検討は行なわない事とする。資料的には本遺跡第1次調査時のST13住居の土器群がまとまりをもち、整理検討が進めばその様相と異同は明確に提示できると考えている。但し、見通し的な見解を述べれば、第II群土器との隔差が少なく、お花山古墳群のD群よりは前出的、薬師堂・舞台式ではより薬師堂例に近いであろうと考えられる。

以上、素材の希少さにもかかわらず冗長すぎる検討と考察を加えた観もあるが、それは本県における土師器研究の長い停滞に由来しているとも言えるであろう。ここで研究史を顧みる余裕はないが、山形市嶋遺跡の調査以来既に20年に近い歳月が過ぎようとしている。

近年の調査研究とその成果からは、従来の古墳観および辺境として規定された当地域の古墳時代と文化観は急速にその認識と評価を変えようとしている。^{注28}こうした中で、従来の資料から脱し来れない土器群の研究はその見通しを持つ事さえ困難な状況にあったと言える。ここでは、幸いにもお花山古墳群の調査から捉えられたA→D群の土器様相、先学の天神山遺跡出土遺物に対する積極的な評価、および福島県での5世紀後半～6世紀後半までの土器群研究の進展等から辛じて本県域でのあり方とその変遷に見通しと展望がもてたと言える。本文での立論はその限りでは確たるものとは言い切れず今後ともその検証と補正を行なう必要があるだろう。以下では既述の土器群の関係を序列としてまとめ、本遺跡出土土器群の編年の位置づけとする。



VI まとめと課題

今回の調査で検出された2棟の住居および出土遺物から現在可能と思われる検討を行なった所、それが不十分なものであったにしろその内在的価値は非常に大きなものがあつたと言える。特に本遺跡の第II群土器に対する認識は、従来の知見にはある意味でなかったものであり、^{註29}またお花山古墳群のA群土器についても同様であつた。ここでは、福島県の母畑関係遺跡での成果が特筆されねばならない。今後は、第I群土器も含め特に第III群土器以降の内容理解とその再編成が残された大きな課題であると考えている。

本文では、資料的充実を見る福島県南部との比較が中心とならざるを得なかつたが、福島県北部での様相や宮城県域との比較検討が可能となる段階に至ればより本県域と他地域での異同が明確となる事は明白である。宮城県での成果では、遠見塚古墳の調査で検出された第12トレンチ第III土器群^{註30}の存在が注目される。しかし、坏類に限定され、南小泉II式の要素が未だ強いと見做される事から6世紀前半代に比定できる資料群が現段階では見出し難いとしなければならない。6世紀中葉代についても同様である。

一方土師器以外では子持勾玉、須恵器蓋等の遺物を検出し得たが、その帰属すべき土器群の特定は不可能であつた。子持勾玉の形態的特徴からは5世紀代、同じく須恵器蓋についても深身・小径・稜の明確性等から5世紀末葉代(TK47)^{註31}が推測されるに止まる。

注・引用文献・参考文献

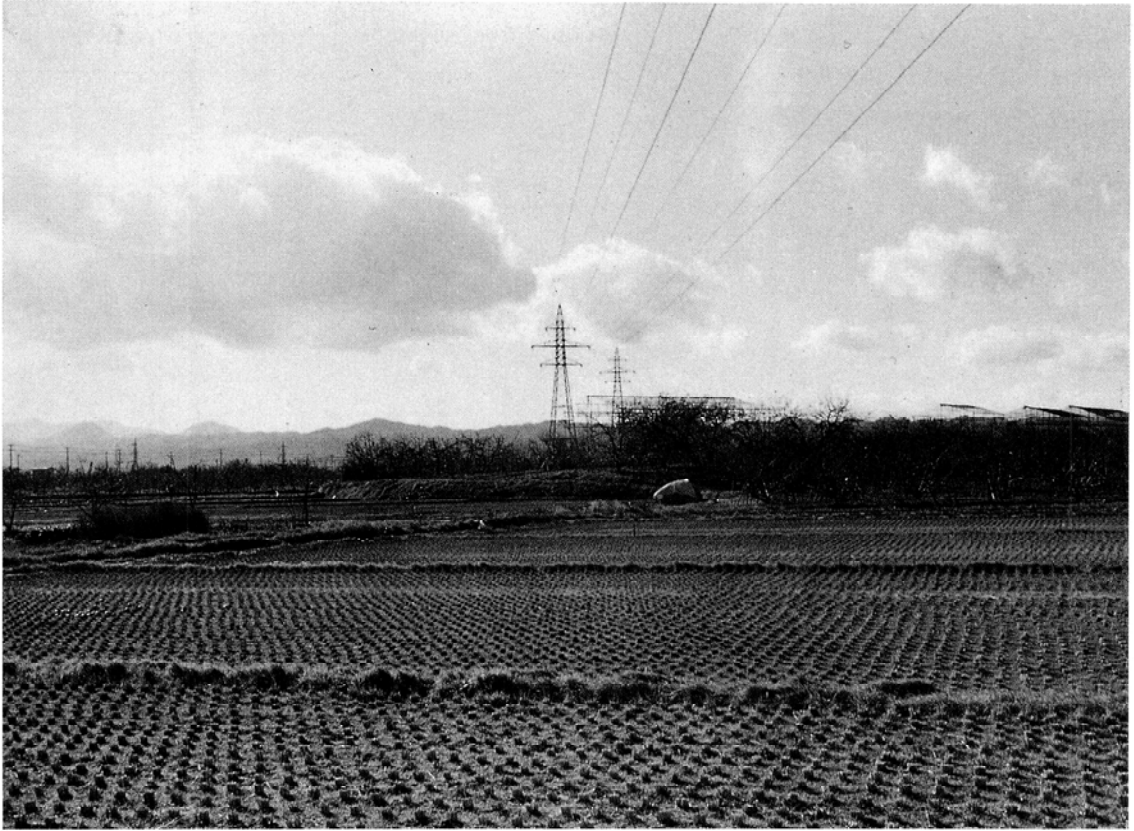
- 1) 志間泰治(1958)「宮城県角田町住社発見の竅穴住居跡とその考察」『考古学雑誌』第43巻第4号P43~51 日本考古学会
- 2) 柏倉亮吉・武田好吉・加藤 稔(1968)「嶋遺跡」『山形市史』別巻1 山形市
- 3) 東海林次男(1976)「出羽南半の古墳文化」『山形考古』第2巻第4号P39~60 山形考古学会
- 4) 柏倉亮吉・相田俊雄(1969)「古墳文化」『山形県史考古資料』資料篇11 P78~87 図版908~911 山形県
- 5) 川崎利夫・野尻 侃・横戸昭二(1979)『大之越古墳発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第18集 山形県教育委員会
- 6) 長橋 至・佐藤正俊・渋谷孝雄(1985)『お花山古墳群発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第85集 日本道路公団仙台建設局 山形県教育委員会
- 7) 横戸昭二(1972)「山形市鷲の森遺跡」『山形考古』第2巻1号P19~27 山形考古学会
- 8) 山形県教育委員会(1983)『三軒屋物見台遺跡調査説明資料』
山形県教育委員会(1984)『三軒屋物見台遺跡第2次調査説明資料』

- 9) 日黒吉明・佐藤博重・大越道正「佐平林遺跡（Ⅰ～Ⅳ区）」(1978)『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ』福島県文化財調査報告書第67集 P 1～116 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 10) 大越道正・橋本博幸・松本 茂(1983)「葉師堂遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告13』福島県文化財調査報告書第117集 P 1～136 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 11) 氏家和典(1957)「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14 P 1～14 東北歴史学会
- 12) 手塚 孝・菊地政信(1980)「八幡堂遺跡」『米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書第Ⅱ集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 8 集
- 13) 佐藤庄一・名和達朗(1985)「沢田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第88集 山形県・山形県教育委員会
- 14) 加藤 稔(1973)「最上川流域における古墳文化の展開」『最上川流域の歴史と文化』P 109～164 工藤定雄教授還暦記念論文集 山形史学研究会
川崎利夫(1973)「山形盆地の古式土師器」『最上川流域の歴史と文化』P 83～108 工藤定雄教授還暦記念論文集 山形史学研究会
- 15) 柏倉亮吉・小野 忍(1973)「扇田遺跡」『東根市西北平坦部の遺跡群—古墳から条里へ—』P 12～43 東根市教育委員会
- 16) 長井政太郎(1949)「山形県内の石製模造品」『縄紋』3
- 17) 伊藤 忍(1972)「山形市天神山遺跡」『山形考古』第2巻第1号 P 9～18 山形考古学会
- 18) 川崎利夫(1972)「庄内平野の土師式土器—鶴岡市矢馳出土の土師式土器を中心として—」『庄内考古学第11号』P 10～18 庄内考古学会
- 19) 茨木光裕・横戸昭二(1977)「天神山遺跡調査概要—第3地点を中心として—」『山形考古』第3巻第1号 P 13～21 山形考古学会
- 20) 山内幹夫(1980)「西原遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』P13～106 福島県文化財調査報告書第85集 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 21) 玉川一郎・大越道正(1978)「大玉村上高野遺跡出土遺物の再検討—特に2号住居跡出土の坏形土器を中心として—」『しのぶ考古』7 P 1～11 しのぶ考古学会
- 22) 玉川一郎(1981)『舞台』福島県岩瀬郡天栄村教育委員会
- 23) 鶴間正昭(1985)「(3)第3号墳出土土師器の分類とその編年」『本屋敷古墳群の研究』P 258～266 法政大学
- 24) 高橋信一(1983)「阿武隈川流域における古墳時代中期の土師器とその問題」『しのぶ考古』8 P 21～43 しのぶ考古学会
- 25) 日高 努・大越道正・橋本博幸・安田 稔(1980)「佐平林遺跡Ⅷ区」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』P 107～298 福島県文化財調査報告書第85集 福島県教育委

員会・財団法人福島県文化センター

- 26) 田中正能他(1974)『太田遺跡』郡山市文化財調査報告書第20集 郡山市教育委員会
- 27) 玉川一郎(1981)前掲22に同じ。P79～85
- 28) 近年の調査進展により置賜盆地では稲荷森前方後円墳・戸塚山山頂古墳群・下小松小森山第61号前方後円墳等の存在が確認された。一方、山形盆地ではお花山古墳群中24基の調査から5世紀末葉～6世紀代を中心として築造された古墳群のあり方や副葬品の内容が把握された。また埴輪をめぐらす東北最大の円墳とされる菅沢2号墳の調査が1985年度より実施されている。これらは、当地域における古墳築造の開始や畿内政権他近隣地域との関連を探る上では重要な位置を占めると考えられ、その認識と評価は従来の古墳・古墳時代観を一変させよう。
- 29) 天神山式は「引田式」並行として型式設定されたが、厳密には氏家氏が示された引田式とは似て非なるものであったと言えよう。宮城県の成果では、従来引田式の特徴とされた大方は南小泉II式の範中に含まれるとされ、その後南小泉II式の三段階変遷が提示されている。白鳥・加藤他(1974)「岩切鴻ノ巣遺跡—東北新幹線関係遺跡調査報告書I」『宮城県文化財調査報告書』第35集、丹羽 茂(1983)「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集 宮城県教育委員会。本論でも基本的に同じ考えであるが、県域での資料不足と相互の比較検討が充分行なえなかった事から予察的に扱った。
- 30) 結城慎一・工藤哲治(1979)「史跡遠見塚古墳 昭和53年度環境整備予備調査概報」『仙台市文化財報告書第15集』仙台市教育委員会
- 31) 田辺昭三(1966)『陶邑古窯跡群I』平安学園考古学クラブ

版 圖



遺跡遠景（東から）



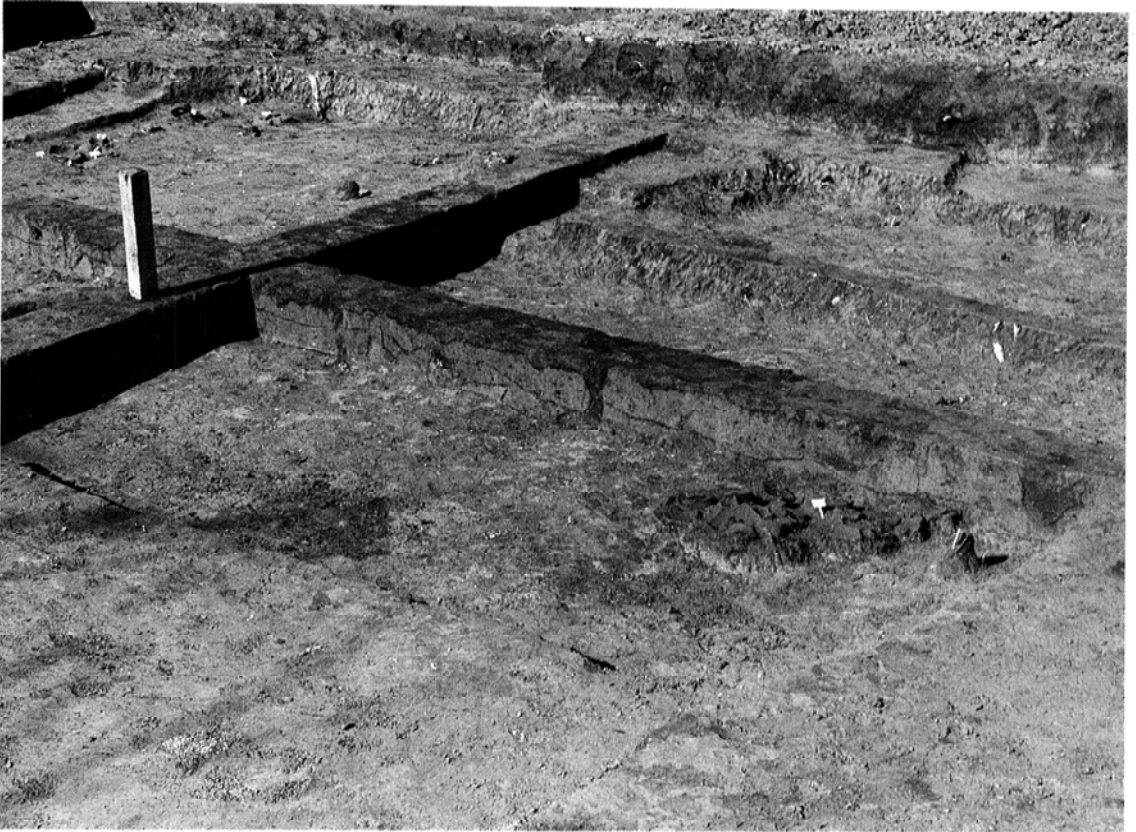
遺跡近景（西から）



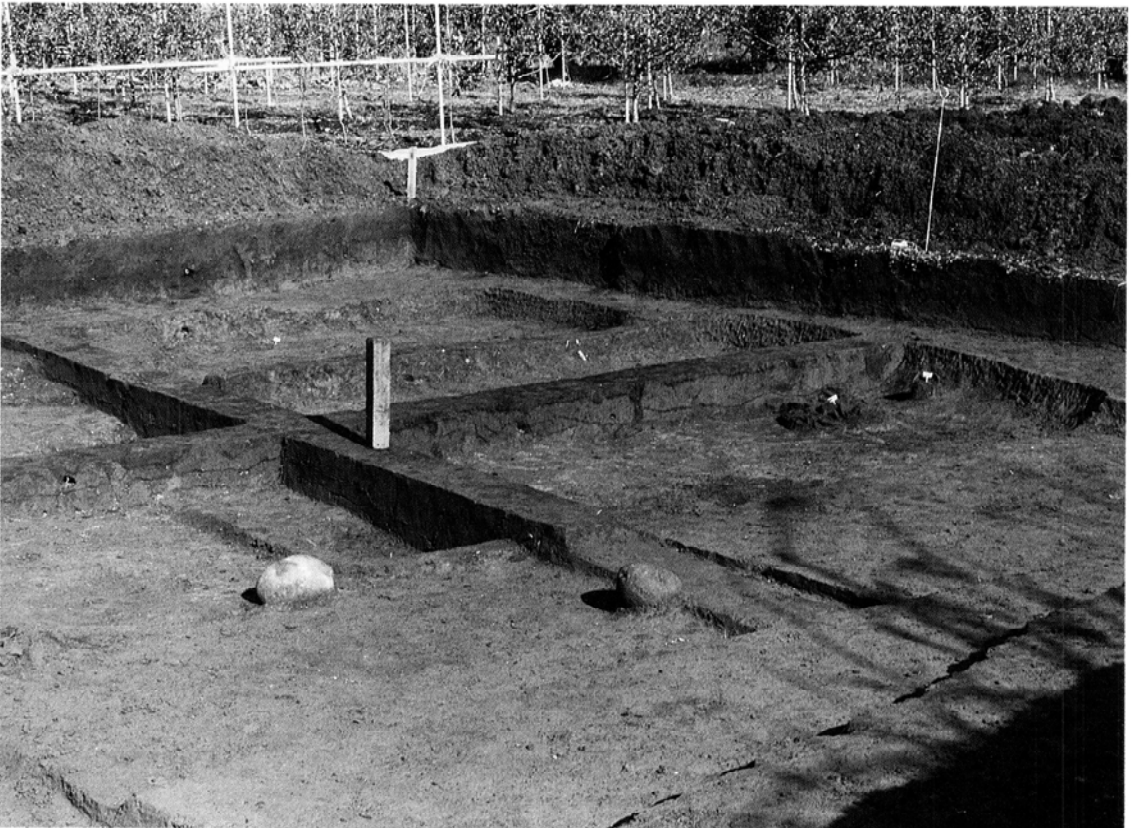
発掘風景（東から）



ST1・2 全景（南から）



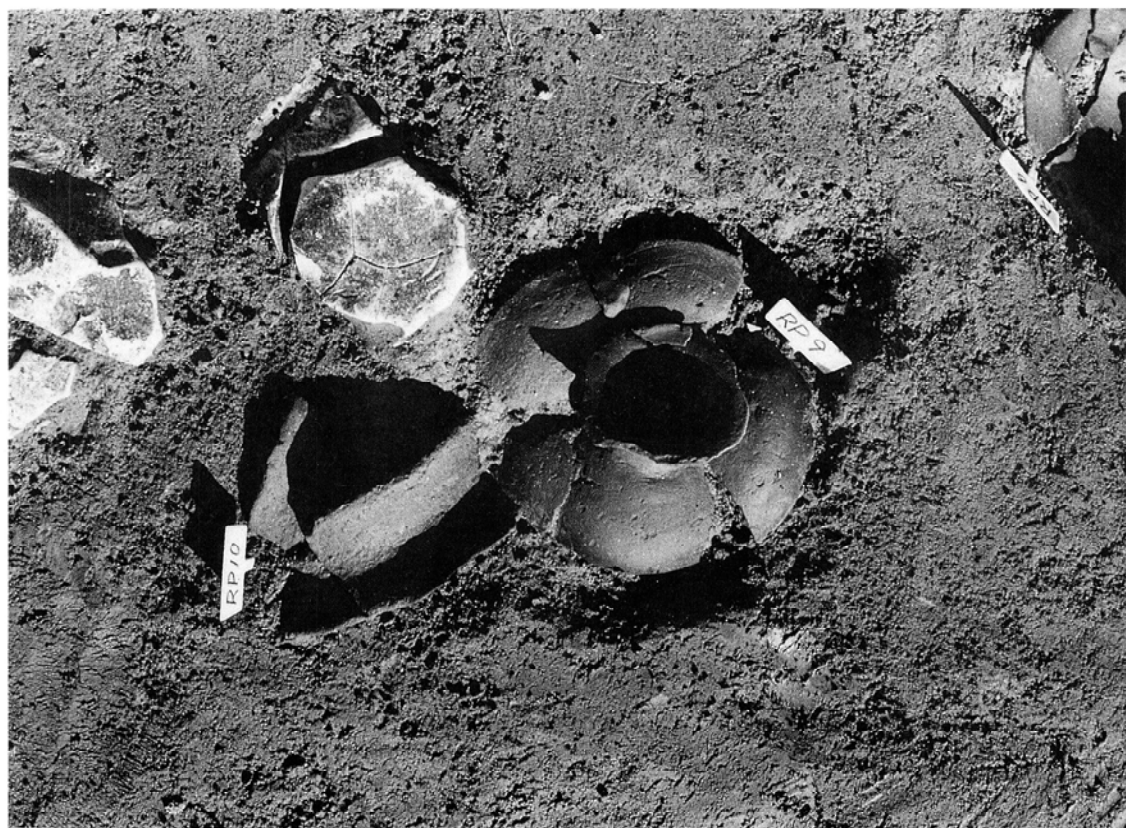
ST2 東西土層断面 (南から)



ST2 東西・南北土層断面 (南西から)



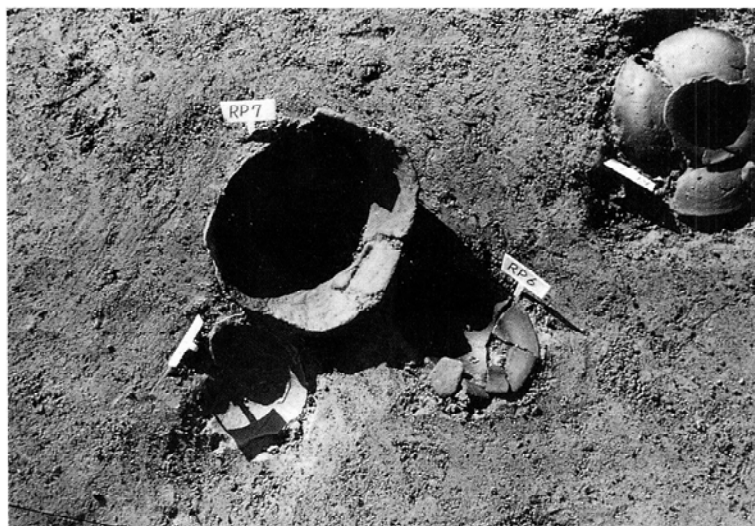
ST1 床面上での遺物出土状況



ST1 RP9・10 出土状況



ST1 北西コーナーでの出土状況



ST1 RP6-7-8 出土状況



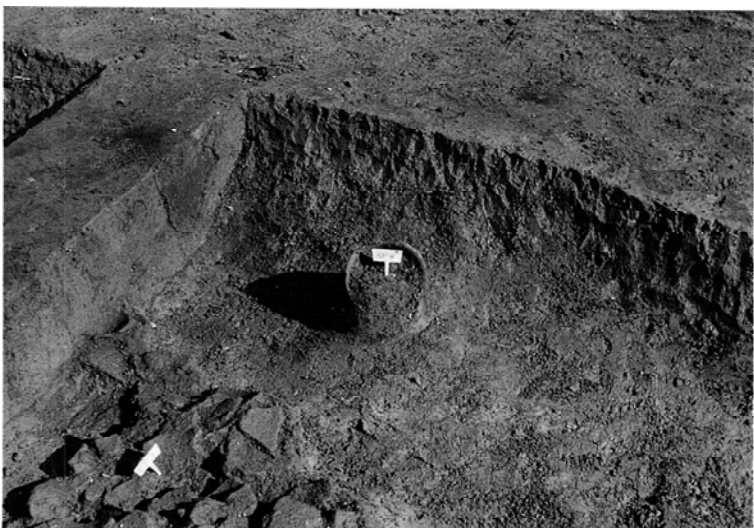
ST1 RP12 出土状況



ST1 RP17・18 出土状況



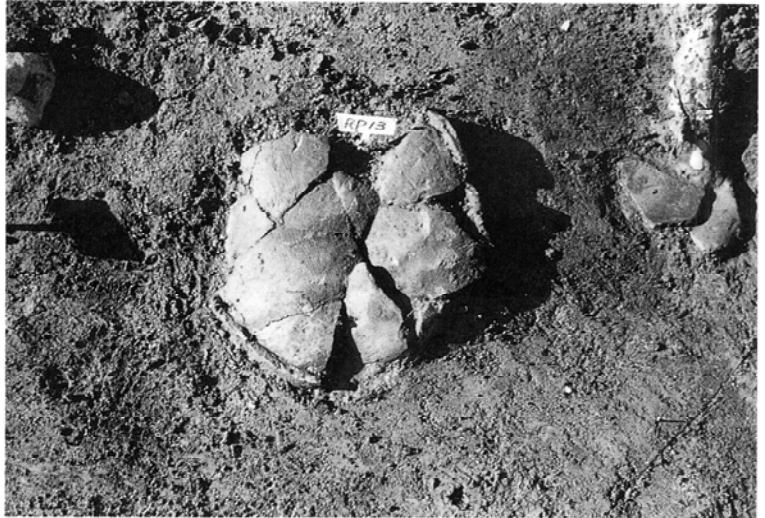
ST2 RP3 出土状況



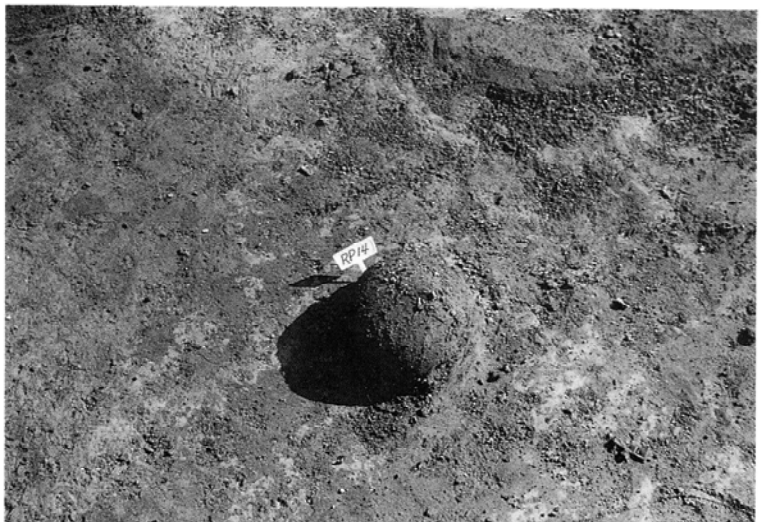
ST2 RP4 出土状況



ST1 RP13·20 出土状况



ST1 RP13 出土状况



ST1 RP14 出土状况



1 (RP9)



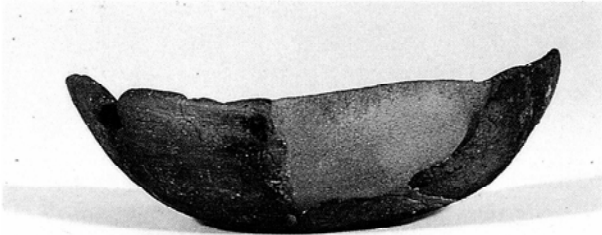
2a (RP6)



2b S=1/2



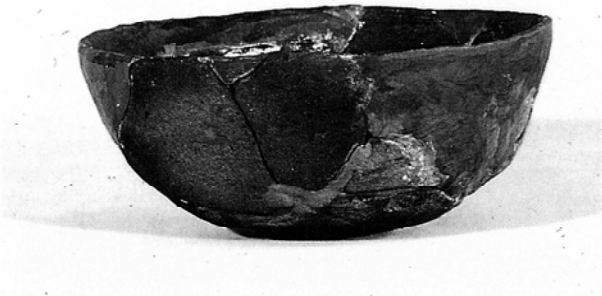
3 (RP20)



4 (RP15)



6 (RP14)



5 (RP19)

S = 1/2



7 (RP21)



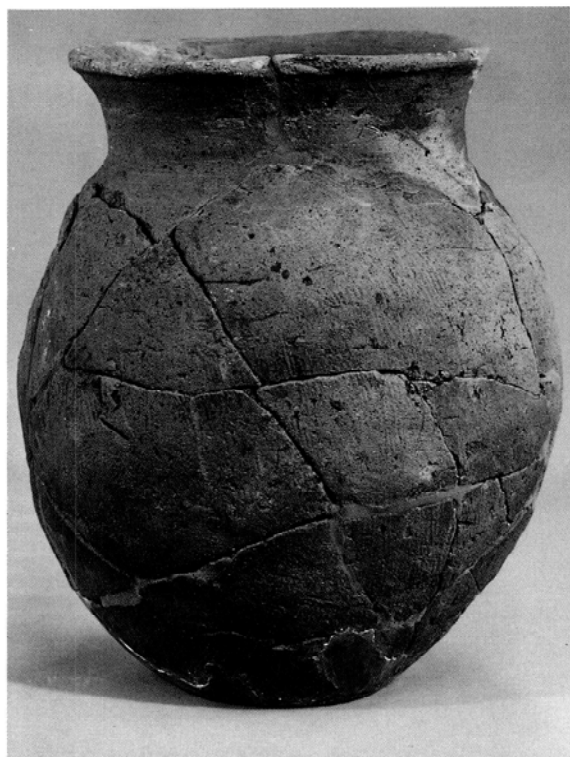
8 (RP15)
S=1/2



11 (RP7)



18 S=1/2



15



14



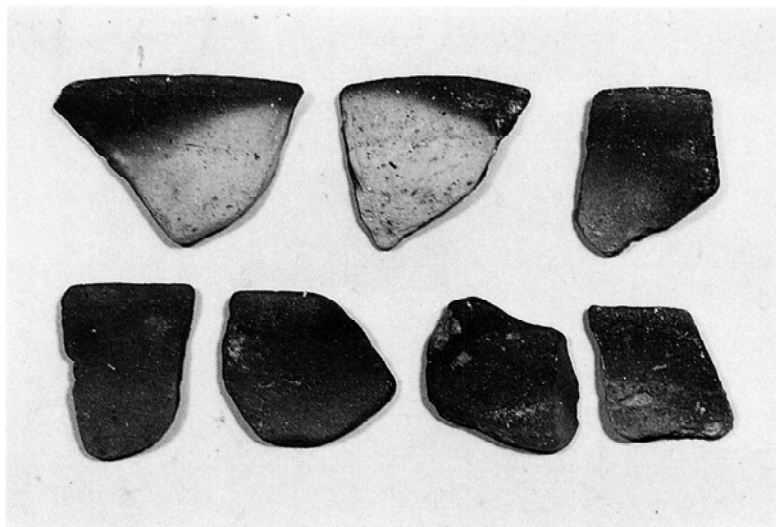
13a



13b



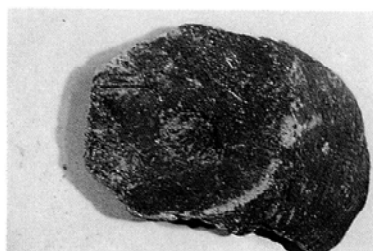
16



ST1 出土土師器坏口縁部



同上坏内面



ST1 出土鉢(9)底部



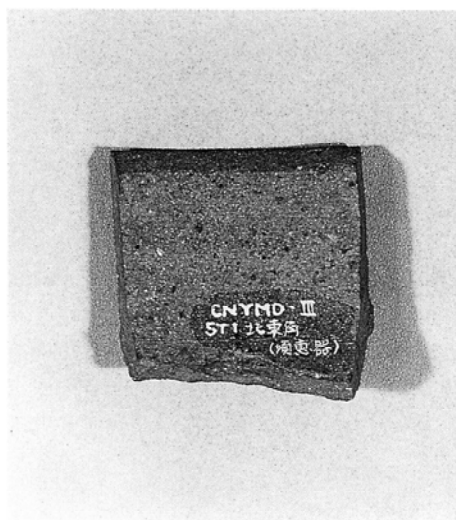
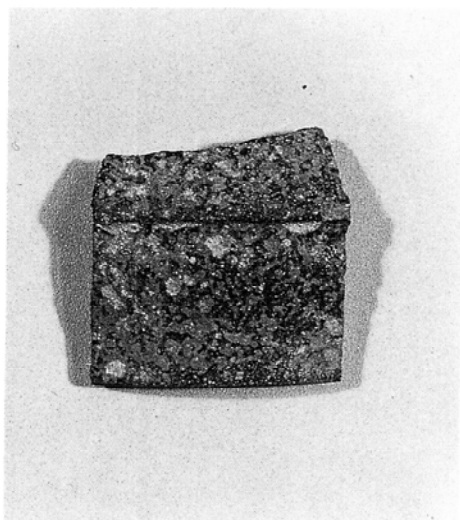
20 (RP4)



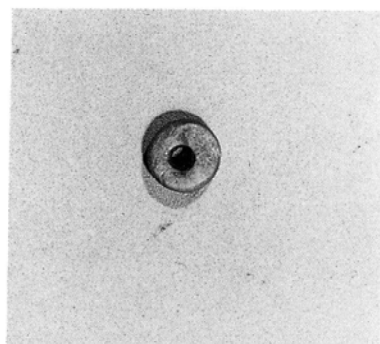
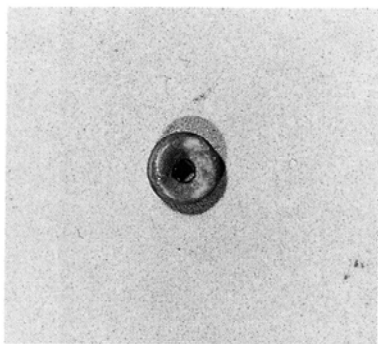
21 (RP3)
S=1/2



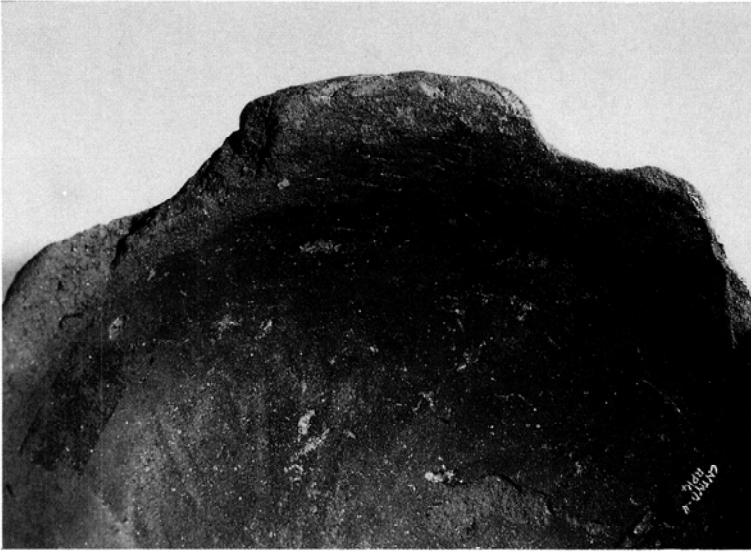
子持勾玉 (RQ1)



須恵器蓋



丸平玉 (RQ2)



内黒坯内面のミガキ(RP14)



土師器甕外面のハケメ(RP13)



土師器甕外面のミガキ(ST1)



高坯外面のミガキ(RP4)



土師器甕外面のハケメ(RP5)

山形県埋蔵文化財調査報告書第106集

三軒屋
もの み だい 遺 跡
物 見 台 遺 跡
発掘調査報告書(1)

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月25日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 (株) 大風印刷
